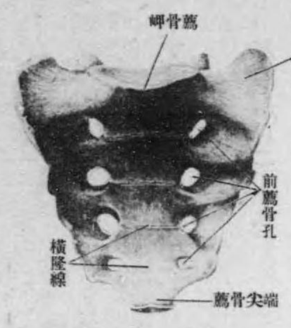
第百二十五圖

薦骨を前下方より見たる圖



第百二十六圖

薦骨を後上方より見たる圖

第百二十七圖

薦骨及尾骶骨を側面より見たる圖

薦骨岬

尾骶骨

れを**薦骨岬**と云ふ、其兩側面は薦腸關節によりて髖骨と關節し、其下端は薦尾關節により尾骶骨と關節す、この薦尾關節は後方に向うて多少移動することを得るも其他の關節は殆んど全く不動性なり、其前面は強く後方に向うて彎凹し四對の横線と左右四對の孔とあり骨盤神經の出入孔なり、其後面の正中線に沿ひて三乃至四個の突隆部ありこれを**中薦骨櫛**と云ふ、其内部は空洞をなし脊髓管に連り脊髓の末端を入る。

(第二)尾骶骨第百二十八及百二十九圖を見よ)。

この骨は又尾閭骨とも云ひ元來四個の小脊椎骨が合して一個と成りたるものにして大凡三角形をなし其尖端は下方に向ひ、上端は薦尾關節により薦骨の下端と關節す。

髖骨

腸骨

坐骨

第百二十八圖

尾骶骨を前方より見たる圖

第百二十九圖

尾骶骨を後方より見たる圖

(第三)髖骨又は**無名骨**第百三十及百三十一圖を見よ)。

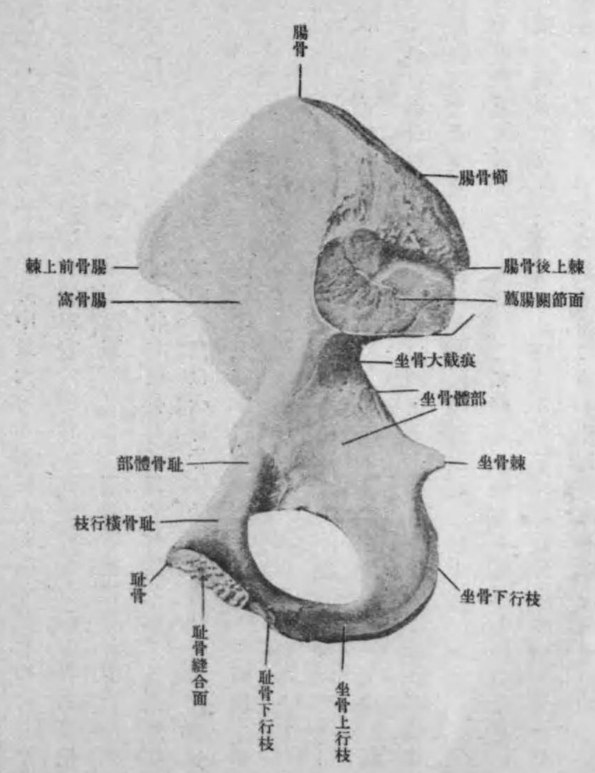
この骨は全身中最大なる不正形を呈するものにして上方の腸骨、下方の坐骨、前方の耻骨の三つの骨が相癒合して生せるものなり。後方は薦腸關節により薦骨と關節し、前方は耻骨縫合によりて左右の耻骨相縫合して以て骨盤の側壁及前壁を形成するものにして其髀臼は大腿骨の骨頭を入れて股關節を作る。

腸骨は髖骨の上部を占め體部と翼部とを區別す、體部は下方に位し厚き硬き部分にして翼部は體部の上方に位する薄き扁平なる部にて孰れも内外兩面あり、内面は陷凹して**腸骨窩**を作り其下方に一條の隆起線ありこれを腸骨の**無名線**又は**孤形線**と云ふ、上緣部はこれを**腸骨櫛**と云ひ其前端の突出部を**腸骨前上棘**と云ひ其後端の突出部を**腸骨後上棘**と云ひ孰れも骨盤外計測の測定點をなす。

坐骨は髖骨の後下方を占むる部分にして體部及枝部を區別し、枝部は更に後方の廣き下行枝と前方の狹き上行枝とに分たる、其下行枝の後緣にて内方に突隆せる部を**坐骨棘**と云ひ更に下りて其下端に近く骨質の厚き部を**坐骨結節**と云ひ坐位

第百三十圖

右側髖骨を骨髖側内側より見たる圖

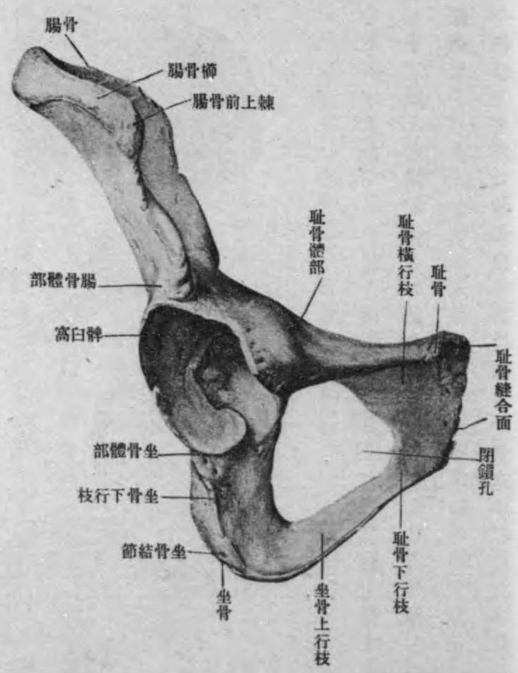


に於ける身體の重點となる。

恥骨は髖骨の前下部を占むる部分にして體部と枝部とより成り、枝部は更に横行枝と下行枝とに分たる、横行枝は體部より前内方に走り前方に於て他側の同名骨と接合して恥骨縫合を作る、其上縁はこれを恥骨櫛と云ひ腸骨の無名線に連續して大骨盤腔と小骨盤腔との界をなす、其腸骨に相接する部位に極めて僅に隆起せる所ありこれを腸恥結節と云ふ、下行枝は恥骨縫合より下外方に走り坐骨の上行枝と連結す。

第百三十一圖

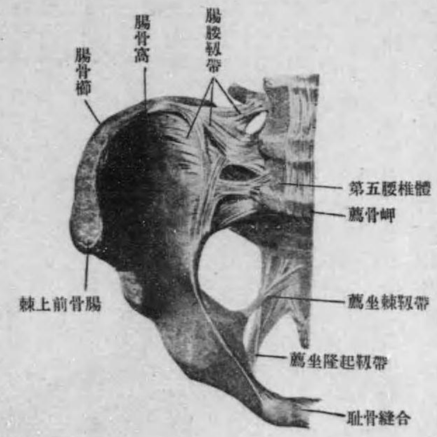
右側髖骨を前側方より見たる圖



恥骨と坐骨との間にある橢圓形の孔腔を閉鎖孔と云ひ其大部分靱帶の膜にて閉ぢらる、左右恥骨下行枝と坐骨上行枝とより作らるる弓狀の門を恥骨弓と云ひ男女により著しき差異ありて第百三十七圖を見よ)分娩と大なる關係あり。

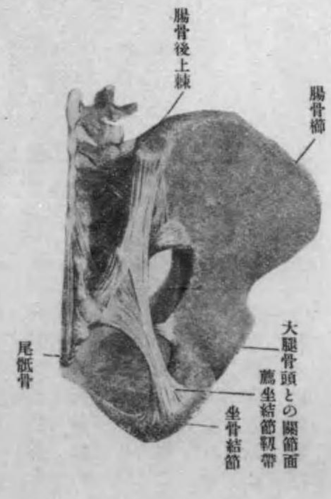
第百三十二圖

右骨盤半分の靱帶を示す(前上方より見たる圖)



第百三十三圖

骨盤の右半側に於ける靱帶(後方より見たる圖)



骨盤腔

以上骨盤を形成する諸骨は上記の諸關節及縫合を以て相連結するのみならず第百三十二及百三十三圖に示すが如き複雜なる靱帶によりて其連結を益々强固にさる

骨盤腔の區分

以上の如き構造を有する骨盤は後方は薦骨岬、側方は腸骨無名線、前方は恥骨櫛により

大骨盤腔

小骨盤腔

骨盤入口

て成る一つの輪狀の假定線によりて上方の大骨盤腔と下方の小骨盤腔とに區分さる。

大骨盤腔　は後方は第五腰椎、側方は腸骨翼部、前方は前腹壁の下部より成り、廣濶にして胎兒娩出に對し抵抗を及ぼすこと殆んどなく從うて分娩とは直接に大なる關係を有せざれども其形狀及大さはやがて小骨盤腔の形狀及大さを推定するの助をなすものにして生體に於ける骨盤の測定に必要なること既に述べたるが如し(第百三十六頁を見よ)。

小骨盤腔　は通常單に骨盤と云ひ上記の如く殆んど移動性なき狹き一骨管腔なるのみならず其形、複雜從うて其大さは部位によりて廣狹不同にして分娩と直接に極めて親密なる關係を有する部分なり、以下これを詳述すべし。

小骨盤腔の區分、形狀及大さ(第百三十四圖を見よ)。

小骨盤腔はこれを一、骨盤入口二、骨盤腔三、骨盤出口の三部に區分することを得。

骨盤入口　は又骨盤上口とも云ひ小骨盤腔の最上部卽ち入口部にして上記大骨盤腔と小骨盤腔との境界面に相當する一平面を云ひ其形橫橢圓形にして其徑線及其正規的長さ次の如し。

一、直徑線又は縱徑線或は眞結合線　とは薦骨岬の中央より恥骨縫合の上緣に到る最短距離にして一〇・七仙迷。

二、橫徑線　とは左右腸骨無名線間の最大距離にして一二・一仙迷。

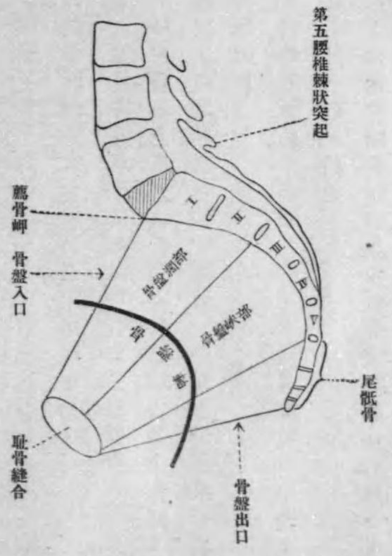
三、第一又は右斜徑線　とは右側薦腸關節部より左側腸耻結節に到る距離を云ひ一二・〇仙迷。

四、第二又は左斜徑線　とは左側薦腸關節部より右側腸耻結節に到る距離を云ひ一二・〇仙迷。

骨盤腔　は骨盤入口と骨盤出口との間に介在する間腔にしてこれを上方に位して廣き骨盤濶部又は廣部と、下方に位し狹き骨盤峽部とに區分し、兩者の境界は後方は第二及第三薦骨椎の癒合部、側方は髀臼窩の上緣に相當する部位、前方は耻骨縫合後面の中點を含む一假想面なり、而してこれ等兩部の形狀及大さを知るために骨盤入口部に於けると同樣なる徑線を假設し其正規的長さ次の如し。

第百三十四圖

小骨盤の縱斷面模型圖



(甲)骨盤濶部に於ては

一、縱徑又は直徑線　とは第二及第三薦骨椎癒合部の中央より耻骨縫合後面の中點に到る距離を云ひ一一・三仙迷。

二、橫徑線　とは左右髀臼の中點に相當する骨盤內壁間の距離を云ひ一二・五仙迷。

三、斜徑線　とは大坐骨截痕上緣より他側閉鎖孔上緣に到る距離を云ひ第一及第二を區別すること入口部と同じ各一三・五仙迷。

(乙)骨盤峽部に於ては

一、縱又は直徑線　とは薦骨の尖端卽ち薦尾關節部より耻骨縫合の下緣に到る距離を云ひ一一・五仙迷。

二、橫徑線　とは兩側坐骨棘間距離を云ひ一〇・〇仙迷。

三、斜徑線　は濶部のそれに相當すれども兩測定點共に軟部に當るを以て一定數の長さを得ず。

骨盤出口　は又骨盤下口とも云ひ、後方は尾骶骨の先端、側方は坐骨結節、前方は耻骨弓によりて圍繞せらるる平面を云ひ、其徑線及其正規的長さ次の如し。

一、縱又は直徑線　とは尾骶骨の先端より耻骨縫合の下緣に到る距離を云ひ、其長さ平時に於ては九仙迷なるが、分娩時には兒頭により尾骶骨が强く後方に壓退せらるるため一一・一仙迷に延長す。

二、橫徑線　とは兩側坐骨結節間距離を云ひ一一・〇仙迷。

三、斜徑線　は兩側定點共に軟部に當るを以て一定數の長さを得ず大凡一〇・〇仙迷な

り。

以上小骨盤腔各部分に於ける諸徑線の長さを比較するに、骨盤入口部に於ては其橫徑線、骨盤濶部に於ては其斜徑線、骨盤峽部乃至出口部に於ては其縱徑線の最長なるを知る卽ち上記骨盤各部に於ては上記最長徑線に相當せる部位に於て最も廣く從うて抵抗最小なるを意味するものにて後述する正規分娩機轉の第二廻轉は實にこれに原因して起るなり。

其他小骨盤腔には次の諸徑線を假定す。

對角結合線

一、對角結合線　は薦骨岬の中央より耻骨縫合の下緣に到る最短距離を云ひ、其正規的長さ一二・五乃至一三〇仙迷にして、實地に於てはこの數より一・八乃至二・〇仙迷を減じたる數を以て眞結合線の長さとなすこと既に述べたるが如し。

骨盤軸

二、骨盤軸　は一名骨盤誘導線とも云ひ上記骨盤腔各部分に於ける縱徑線の中點を結合して生ずる第百三十四圖に示すが如き一つの彎曲せる想像線にして胎兒及其附屬物はこの線の方向に於て母體外に排出され、內診指又は器械はこの方向に於て挿入さるるなり。

骨盤の高徑

三、骨盤の高徑　とは骨盤入口部と出口部との高さを云ひ、後壁の高さは薦骨岬より尾骶骨先端に到る距離にして一二乃至一三・五仙迷、前壁の高さは耻骨縫合の上緣より下緣に到る距離にして僅に四仙迷なり。

骨盤の傾斜

骨盤の傾斜

既に述べたる如く骨盤は脊柱に對し一定の傾斜卽ち角度をなして相縫合す、從うて直立位に於て眞結合線と水平線との間には一定の角度(平均四十四度)をなすこれを骨盤の傾斜と云ひ個人的差異あるのみならず同一人にても其位置により多少の差を生ずるものなり。

第二項　男女骨盤の差異

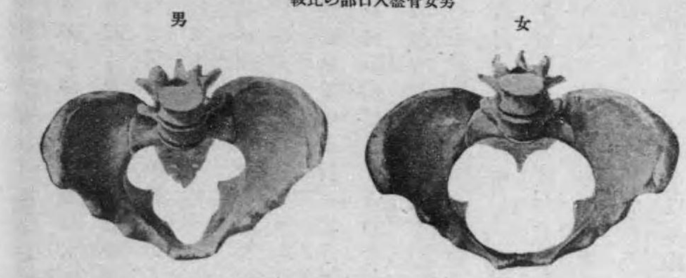
(甲)全體としての差異は男子の骨盤は深くして狹く、女子のは淺くして廣し。

(乙)部分的の差異は　女子骨盤に於ては、一、薦骨廣くして短く、薦骨岬は男子の如く突出せず、二、骨盤入口部はより廣く其形第百三十五圖の如く橫橢圓形にして男子の如く心臟形ならず、三、骨盤出口部もより廣くして男子の如く狹隘ならざること第百三十六圖に示すが如し、四、耻骨弓は男子のそれより大凡二十乃至二十五度廣く(第百三十七圖を見よ)、五、左右の髀臼著しく相隔り稍々前方に向ふ(第百三十七圖を見よ)。

以上の如く小骨盤腔は複雜なる形狀及大さを有するのみならず脊柱に對して一定の傾斜(卽ち直立位に於て後上方より前下方に傾く)をなす、而も是等の關係は分娩と重大なる關係を有するを以て殊に其形狀及大さを熟知することは極めて必要なり、而して其正規的の形狀及大さは上記の如くなれども此等の數は皆骨盤の骨骼より得たる

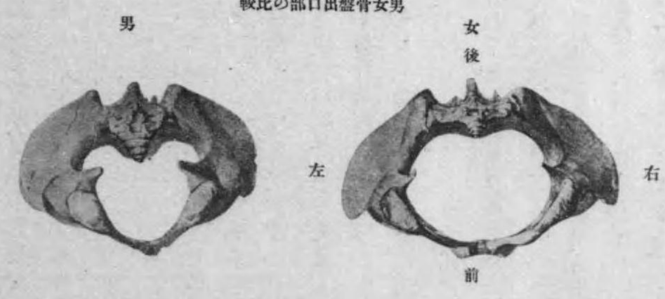
第百三十五圖

男女骨盤入口部の比較



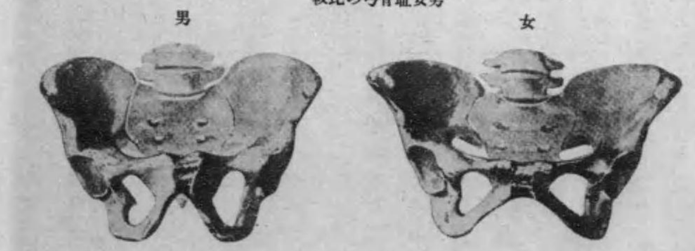
第百三十六圖

男女骨盤出口部の比較



第百三十七圖

男女耻骨弓の比較



數にて極めて正確なれども、實地に於て生體を取扱ふ場合には直接の用をなさず、故に吾人は止むを得ず既述の如き方法によりて內及外骨盤測定をなして以て間接に眞の骨盤腔の形狀及大さを推定するに止むるなり。

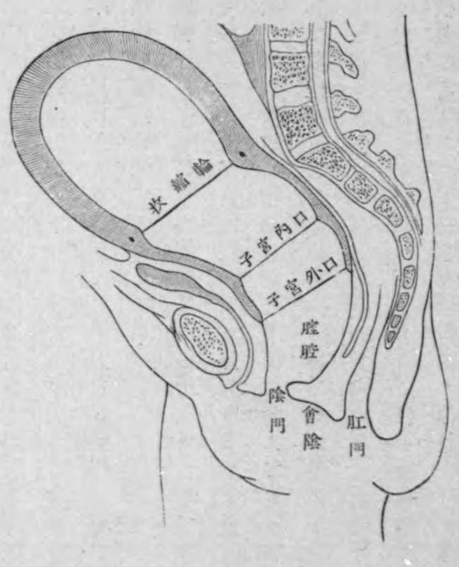
第二節　軟部產道

軟部產道　とは子宮腔に始まり頸管腔腔を經て陰門乃至會陰に終る總て軟部組織より成る腔管にして分娩時に胎兒及其附屬物の通過する路を云ふ(第百三十八圖を見よ)。

軟部產道の擴開　は次に述ぶる如く娩出力及胎兒の下降によるものにして就中子宮口及頸管は主として卵胞により伸展擴開せられ、腔腔及陰門は胎兒の先進

第百三十八圖

軟部產道の圖



部により擴開さる、從うて若し娩出力に異常あるか又は胎兒の位置に異常あり、ために卵胞の形成又は胎兒先進部の下降に異常を來す時は軟部產道の擴開不充分にして分娩の澁滯を來すか又はあまり急劇にして大なる損傷を來すに到る。

今子宮口及頸管の擴開に就て考ふるに、

子宮壁は其體部殊に底部に於て筋組織最もよく發育して厚く、下子宮部及頸管部は之れに反す、今分娩開始し子宮壁收縮して陣痛來るや其發作時に於ては體部は强く收縮し從うて壁の厚さ增加し胎兒を强く下方に向ふて壓迫す、其結果として下子宮部は寧ろ壓伸されて其壁菲薄となる、即ち陣痛發作時に於ける子宮壁は其部位によりて其厚さの增加する所と減弱する所とを生じ其境界部は腹壁外より一つの淺き溝として觸知し罕れに目擊することを得ることあり、これを**收縮輪**と云ひ普通子宮內口の上方約一乃至二仙迷の所にあり、下子宮部壁の强く伸展され菲薄となる程益々明瞭となり且つ其部位上昇し耻骨縫合上緣上一手掌橫徑以上に存する場合には下子宮部が過度に伸展されしを意味するものにて子宮壁破裂の危險切迫せることを豫知するの助けとなる。

收縮輪

軟部產道の損傷　成熟胎兒の頭部の大さと小骨盤腔の大さとは殆んと相等し、從うて分娩時に上記軟部產道壁は兒頭と骨盤壁との間に挾まれ强く壓迫されて容易に損傷を來すものにて分娩後に於ける軟部產道は常に其全徑路を通じて一つの大なる創面と考ふることを得、從うて若し細菌の侵入せんか忽ちに全面に傳播して恐るべき產褥熱を起し得るなり、これ分娩時は勿論產褥時に於て嚴重なる消毒法を行ふの必要なる所以なり。

軟部產道の損傷

第四章　娩出力(又は排出力、產出力とも云ふ)

娩出力　とは胎兒及其附屬物を娩出せしむる自然の力にして子宮筋肉の收縮即ち陣痛と、腹壁諸筋及橫隔膜の收縮即ち腹壓とより成る。

定義

第一節　陣痛

定義

陣痛　とは分娩時、定期性に反覆し來る子宮筋肉の收縮にして殆んど常に疼痛を伴ふものを謂ふ。

効用　通常分娩を開始しこれを促進せしむ、即ち胎兒及子宮の位置を正當に保ちつつ主として軟部產道殊に子宮口及頸管の擴開を司り胎兒の下降を助く。

種類　次の數種を區別す。

一、妊娠時陣痛、妊娠中に不定期性に來る不規則性子宮收縮を云ひ分娩とは關係なく稀なり。

二、前驅(又は前陣痛、分娩豫定日の近くに於て來る不規則性子宮收縮にして時に續て

次に述ぶる分娩時陣痛に移行して以て分娩を開始することあれども多くは早晩消失し眞の分娩は其數日後に來る、從うて分娩とは直接の關係を有せざれども近き時日中に分娩の開始さるるを豫告するものなり。

三、分娩時陣痛　分娩時に來る陣痛にして次に述ぶる特性を有し分娩の時期により次の四種を細別す。

(イ)準備又開口陣痛、　分娩第一期に來るものを云ひ、子宮口及頸管を擴開する主動力なり。

(ロ)排出又は娩出陣痛、　分娩第二期に來るものを云ひ、胎兒壓出の助けをなす。

(ハ)努責又は戰慄陣痛、　排出陣痛に屬するものにして兒頭が將に陰門を通過せんとするや、陣痛及腹壓其極度に達したために產婦の努責其絕頂にある場合の陣痛を云ふ。

(ニ)後產期陣痛、　分娩第三期に來るものを云ひ後產排出に與る。

四、後陣痛　產褥の初期に來るものにして時日を經過するに從うて不規則性の度を增し頻度及强度を減退す、產褥子宮の復舊機能を補助す。

特性　陣痛には次の特性あり。

一、分娩時に於ける子宮筋肉の定期性收縮なること、而して其收縮する時は子宮は其幅を減じて細長くなり從うて子宮底は少しく高くなり固き抵抗として觸れ且つ殆んど常に疼痛を伴ふ。

二、而も其子宮收縮は突然に一時的ならずして漸次に强く收縮し(この期間を增進期と云ふ)一定の極度に達するや其狀態にて一定時間經過し(この期間を極期と云ふ)次で收縮か衰へ(この期間を減退期と云ふ)て收縮以前の狀態に戻り(以上三期間を陣痛發作期間又は單に陣痛發作と云ふ)その狀態にて一定時間經過せる後(この期間を陣痛間歇(又は休歇期間)又は單に陣痛間歇と云ふ)再び以上の發作及間歇を繰返す、卽ち陣痛、陣痛發作と陣痛間歇とより成るものなり。

三、陣痛は不隨意的に起るものなれども亦精神作用、外來の刺戟によりこれを强弱せしむることを得、例ば驚愕憤怒、はこれを減弱せしめ、子宮の摩擦又は罨法はこれを增强す。

持續時間　は分娩の時期又個人的差異により一定せざれども大凡次の如し、卽ち陣痛發作の全持續は平均六十秒にして極期最も長く增進期及減退期の和より大なり、間歇の全持續は分娩の初期には十乃至十五分なるも分娩進むに從うて短縮し遂には三十乃至六十秒となる。

第二節　腹壓

腹壓は胎兒排出の主動力にして分娩第二期に到りて初めて起る、腹壁諸筋及橫隔膜の

緊張及收縮による、陣痛と異り産婦の意志により増減し得るものなれども兒頭娩出の直前には不隨意的となり強く努責し既述の努責陣痛となる。

かく腹壓の強弱は分娩殊に胎兒排出と大なる關係を有するを以て左に其強弱法を述ぶべし。

(甲)腹壓を強むるには、(イ)産婦の全身的元氣を高め且つ膀胱及直腸の空虛を謀り、(ロ)適當なる産位卽ち下肢を股及膝關節にて輕く屈曲し足蹠を床上に支へ兩手に固定物を握らしめ(ハ)陣痛發作には充分に努責せしめ、間歇時には休息せしむ。

(乙)腹壓を弱むるには、(イ)側臥位を取らしめ(ロ)陣痛發作時に口を大きく開かせ且つ「あー」と高聲を發せしむ。

第五章　正規分娩の經過

分娩は陣痛により先づ子宮口及頸管が擴開されて胎兒の通路を開き、次で腹壓加はりて胎兒を娩出し少時の後胎兒附屬物を排出するを以て正規の經過となし全く連續せる一つの生理的現象なるが、これを大凡次の四期に區分することを得。

前驅期

分娩の前驅をなす期間にして時に全くこの時期なきことあり、この期は分娩豫定日の數日又は十數日前より極めて不規則なる前驅陣痛あり、子宮分泌多少增し、胎動は寧ろ靜かになり、次の如き內診所見ある期間を云ふ。

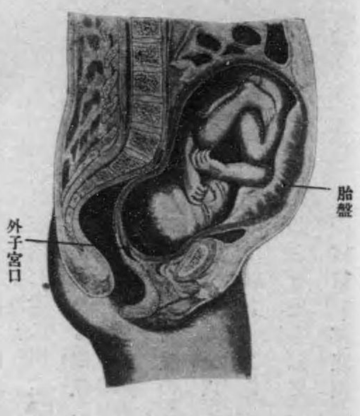
(甲)初妊婦にありては(第百三十九及百四十圖を見よ)圖に示す如く子宮腟部既に消失し而も、子宮外口は全く閉鎖するか又は僅かに開き、兒頭は骨盤入口に進入し固定す。

(乙)經產婦にありては(第百四十一圖を見よ)、圖に示すが如く子宮腟部尙ほ明に存在し而も子宮口及頸管は既に著しく擴開し、兒頭は骨盤入口上に移動す。

第百三十九圖

初産婦の分娩開口期を示す

兒頭は小骨盤腔に嵌入固定し頸管强く開擴し而も子宮口は僅かに開大せるのみ



分娩第一期又は開口或は準備期

本期は規則正しき準備又は開口陣痛の反覆に始まり子宮口の完全に擴開する(これを全開大と云ひ其直徑約十乃至十二仙迷なり)までの期間を云ふ。

準備陣痛開始し時と共に其强さ及回數を增しつつ反覆到來するや胎兒の下降すると

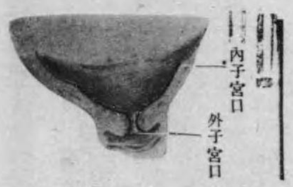
分娩開始の徴候

同時に子宮口は漸次擴開し、ために其附近の卵膜は子宮壁より剝離し出血したために、液を混せる粘液を排出するに到る、これを俗に「印があつた」と云ひ子宮口開大即ち分娩の初徴にして、子宮口開大、規則正しき陣痛發作及び次に述ぶる卵胞形成の四點は分娩開始を知る貴重なる徴候なり、かく卵膜が剝離さるるや以後陣痛發作毎に其中に羊水の一部（これを前又は第一羊水と云ひ、これに對し他の大部分の羊水を後又は第二羊水と云ふ）壓入されたために剝離せる卵膜は胞狀に膨隆して卵胞或は胎胞なるものを形成す（第百四十二圖を見よ）而も其初めに於ては胎兒の下向部が尙ほ未だ充分に骨盤腔内に進入固定せず從うて下向部と子宮壁との間に充分なる間隙あり、ために前及後羊水間の交通充分なるために陣痛發作時には卵胞緊張するも間歇時には子宮壁の弛緩すると共に前羊水は再び上方に還流するを以て卵胞弛緩す、かく陣痛發作及間歇毎に以上のことを繰返し傍ら、漸次卵胞の大さと緊張とを增し以て子宮口乃至頸管を擴開す、かくして子宮口が其直徑五仙迷位まで擴開せらるる頃に到

第百四十一圖

頸るけ於に期初娩分の婦産經
す示な況狀の口宮子及部管

外し存在尙部腟宮子
す開哆口宮子



第百四十二圖

子るけ於に期初娩分の婦産初
す示な況狀の部管頸及部腟宮

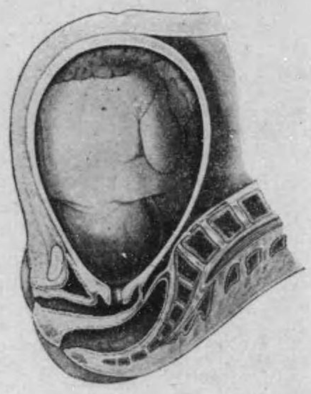
外し失消部腟宮子し而も
す大開だ未口宮子

第百四十三圖

し大開全どん殆口宮子てに期末の卵口開
す示な態狀るすとんせ綻破にさ將胞卵

第百四十二圖

開口期の期初てに期初の成形胞卵
す示ため初の成形胞卵



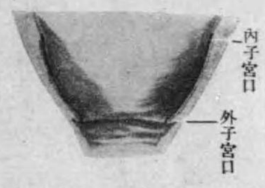
れば胎兒の下向部は骨盤腔内に深く固く進入して前後兩羊水間の交通を殆んど全く絶つために卵胞は陣痛間歇に於ても最早や弛緩することなく絶えず緊張し腟腔内に向うて膨隆するに到る（第百四十三圖を見よ、更に一定時間陣痛が規則的に反覆するや子宮口は遂に全開大し其直徑十乃至十二仙迷となり子宮口緣は極めて菲薄となり強く上方に引退し觸知し得ざるに到り卵胞は遂に破綻す、これを破水又は卵胞破裂と云ひ茲に分娩第一期の終り第二期の初めを告ぐるものとす、この時期に於ける頸管及子宮口の狀態の初産婦と經産婦とによる差異は第百四十四圖と第百四十五圖とを比較注視すべし。

前羊水の量

第百四十四圖

初産婦の開口期の末期に於けるる部管頸子宮及子宮口の狀況を示す

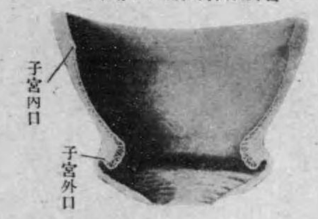
全完どん殆口宮子外及管頸
にか催緣口宮子外し大開に
す存殘に狀膜薄き



第百四十五圖

多産婦の開口期の末期に於けるる子宮頸管及子宮口の狀況を示す

子もるす大開く全は部管頸
す在存にか明ほ尙は口外宮



此期間に於ける産婦の一般狀態は　陣痛が增强するに從うて産婦は漸次苦痛を增し不穩となり分娩に對する恐怖の狀を呈し、輕度の惡寒を覺え時に惡心、嘔吐を催すに到り、殊に初産婦に於ては破水に際し、腟內破裂の感あると同時に多量の羊水流出したために非常なる不安又は興奮を來すことあるを以てよくこれを慰籍せざるべからず。

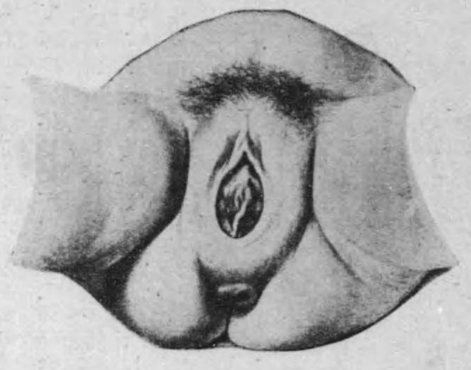
前羊水の量　正規破水時流出する羊水の量は普通二十乃至三十立方仙迷にして而も一時的にて爾後羊水の漏出することなく從うてそれ以上多量に流出するか又は破水後絕えず漏出する場合は多くは胎兒の下向部が開大せる子宮口に適合せずして前後兩羊水間よく交通するためなるを以てこれを放置せんか全部の羊水は胎兒娩出前に流出して非常なる分娩困難を來すを以て早く醫治を乞はざるべからず

分娩第二期又は排出或は娩出期

本期は子宮口の全開大(卽ち正規破水)に始まり胎兒の娩出するまでの期間を云ふ。子宮口全開大し正規破水來るや兒の下向部(多くは兒頭なり、以下兒頭と記述する所は兒の下向部と心得べし)は骨盤腔內に深く進入して以て軟部産道を直接に壓迫するために反射的に腹壓起りて排出陣痛は益々强く且つ頻繁となり從うて兒頭は骨盤腔內を後に述ぶる廻轉をなしつつ漸次骨盤出口に向うて壓下され兒頭の下降するに從うて陣痛は其强さと來る回數とを增し産婦の苦悶は益々增加す、かくして兒頭が骨盤濶部を通過し骨盤峽部に下降するに到れば會陰は兒頭により漸次强く伸展され漸次球狀に膨隆し從うて肛門も開きて其粘膜外飜し來り强き壓迫のため便意を催し又場合によりては糞便を不隨意的に排出して消毒

第百四十六圖

兒頭排臨の狀況を示す



を不完全ならしむることあり(これ分娩前に便を充分に排出し置く必要ある一所以なり)、それより暫時にして陣痛發作時に頭蓋の一部が陰裂間に現はれ陣痛間歇時に再び腟腔内に引退し隱るるに到る、この狀態を**兒頭の排臨**と云ふ(第百四十六圖を見よ)。

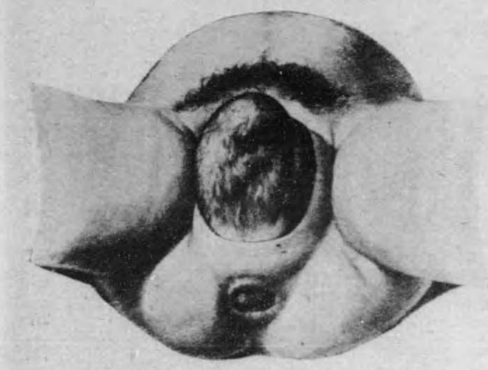
排臨

此時期になれば陣痛及腹壓は其極度に達して努責又は戰慄陣痛となり產婦の苦痛最も甚だしく、ために不隱の狀態を呈し顏面は潮紅し發汗著しく不隨意的に努責し時に全身又は腓腸筋部の痙攣を起すことあり、既にこの時になれば兒頭は最早や陣痛間歇時に於ても陰裂外に露出するに到る、この狀態を兒頭の撥露と云ひ(第百四十七圖を見よ)陰脣及會陰の伸展緊張其極に達し會陰破裂を來し易く、產婦は劇痛のため啼泣し時に失神することさへあり

撥露

第百四十七圖

後頭位撥露の狀況を示す



而れどもこれ多くは一瞬時にして兒頭は次の陣痛發作又は撥露に次で娩出し續いて後續部容易に娩出し同時に後羊水は多少の血液を混じて流出し產兒は母體の股間に第一聲を揚げ、臍帶は其後尙ほ暫く搏動し腟腔を通じて胎盤に連絡し、子宮は著しく縮少したために子宮底は著しく下降して臍窩の高さ(これを臍高と云ふ)又は少しく其上方にあり、產婦は同時に一種爽快の感あり兩三回長大息し陣痛も一時休止し多くは續いて睡眠に陷る。

分娩第三期又は後產期

本期は胎兒娩出直後より後產卽ち胎盤卵膜及臍帶の全く排出し終るまでの期間を云ふ。

後產の排出は稀れに胎兒娩出と同時に行はるることあるも普通は胎兒娩出後十乃至十五分を經て後產期陣痛到來して以て胎盤の剝離を助け普通二十乃至三十分にして全く子宮壁より剝離し、次で陣痛腹壓、腟壁の收縮及び胎盤自己の重量により外界に壓出さる、其際若し胎兒面を先きして排出されんかこれを**シュルツェ氏式胎盤娩出**と云ひ、之れに反し母體面を先きにして排出されんかこれを**ダンカン氏式胎盤娩出**と云ふ(第百四十八圖及第百四十九圖を見よ)實地に於ては其前の場合の方多く見らる。

かく胎盤が子宮壁より剝離する際には必ず子宮壁との間の血管が破斷するために常に出血を伴ふものにして正規分娩に於ける全出血量は本邦婦人に於ては平均約**二百五十立方仙迷**なり。

正規的出血量

第百四十八圖

ダンカン氏式胎盤排出の狀を示す

第百四十九圖

シュルツェ氏式胎盤排出の狀を示す

血管は閉鎖され血栓を生じ全く止血して茲に分娩を終る。

第六章　正規分娩の持續時間

一般に分娩の持續時間は主として　一、娩出力の強さ　二、産道抵抗の大小卽ち骨盤腔の廣さ　三、初産なるか經産なるかに關係するものにして本邦婦人の正規分娩に要する時間は大凡次の如し。

一、分娩第一期は　初産婦に於ては十乃至十二時間、經産婦に於ては四乃至六時間。

二、分娩第二期は　初産婦に於ては二乃至三時間、經産婦に於ては一乃至一時間半。

三、分娩第三期は　初産婦に於ては十五乃至三十分、經産婦に於ては十乃至二十分。

卽ち第一期最も長く、第二期これに次ぎ、第三期最も短く、初産婦に於て長時間を要し殊に高年(三十歳以上)及若年(十八歳以下)の初産婦に於て著し。

以上の如くして後産が完全に娩出せば子宮は硬く收縮し球形を呈し、子宮底の高さは耻骨縫合上緣上四指横徑に位し續て收縮可良ならんか破裂

第七章　分娩の母體及胎兒に及ぼす影響

第一節　分娩の母體に及ぼす影響

分娩の母體に及ぼす影響は種々なれども、之を要するに　一、胎兒及其附屬物の娩出　二、及びそれに對する努力の二因による、左に其主なるものを擧ぐべし。

(甲)胎兒及其附屬物の娩出より受くる影響としては

一、産道殊に軟部産道の損傷、ために分娩時は勿論、其後暫くの間出血及疼痛あり、不幸傳染せんか産褥熱の原因をなす。

二、體重減少す、其度は一定せざれども大凡母體體重一瓩(とは一千瓦を云ふ)につき約百瓦内外の割合なり。

三、血液を損失す、其量亦一定せず、大凡二百五十立方仙迷を以て正規的量となす。

四、其他全身的には、(イ)惡寒又は惡寒戰慄あることあり、これ血液損失、分娩時の冷却、精神的感動等によるものにして發熱を伴ふことなく從うて憂ふるに足らず、(ロ)嗜眠狀態となる、これ分娩時の過度の苦痛一時にとれ、疲勞著しく、且つ精神的安心を得るた

めに來る。

(乙)胎兒及其附屬物排出に對する努力卽ち娩出作用より受くる影響としては、過度の全身的(肉體的は勿論精神的)勞働の結果として、

一、體溫　は攝氏一乃至四分位上昇し、

二、脈搏　は頻數となり緊張增し、

三、呼吸　も迅速となる、

四、其他全身的には　(イ)食慾減退し、(ロ)睡眠困難となり、(ハ)陣痛增强するに從うて疼痛を增し强く努責し、其結果漸次疲勞し甚だしき場合には惡心、嘔吐、不安、興奮、痙攣等を來す。

第二節　分娩の胎兒に及ぼす影響

分娩により胎　の受くる主なる影響次の如し。

一、兒心音　は陣痛發作時に緩徐となり間歇時に再び元に戻る、この關係は破水後に於て著明なり、これ子宮壁の收縮のため胎盤血行障害さるることが其主なる原因なり。

二、胎動　は分娩の進むに從うて減弱し、

三、頭部變形す、　兒頭は產道內に於て最も强き抵抗を被むる部分なり(硬くして大なればなり)而も兒頭を形成する各頭蓋骨の連絡は既述の如く緩潤なるを以て强き抵抗に遭へば相隣れる頭蓋骨は其邊緣互に相層重して(これを頭蓋骨の重疊と云ふ第百五十圖を見よ)其容積を減じて狹き產道の通過を容易ならしめんとす、これを頭蓋の僞態又は應形機能或は累積作用と云ひ、兒頭過大なるか又は產道狹隘なるかにて兒頭娩出の困難なる程益々著明となる。

骨重疊

應形機能

產瘤

第百五十圖

頭蓋骨の骨重疊の圖

左側頭頂骨緣が右側頭頂骨緣の下に重層し右頭頂に產瘤の生ずるを示す

而して其重疊の仕方　は母體の後方に在りて(これを前在すると云ふ)强く抵抗を受くる骨緣が母體の前方に在りて(これを前在する云とふ)比較的抵抗を受くること尠き骨緣の下に層重す、從うて兒頭の產道內を通過する狀態卽ち胎兒の產道內に於ける位置によりて殆んど一定し診斷の一助となるものなり、而れども兒頭娩出して抵抗除去さるるや漸次復舊し分娩後七乃至八日にして全く原形に復するものなり。

四、產瘤の形成　兒頭が產道內に於て强き抵抗を受くるや上記の僞態機能により其容積を縮小して抵抗を減じ以て產道を通過せんと努む、而も尙ほ不充分ならんか兒頭は產道內に於て長き間强き壓迫を被むりために其最も强く壓迫さるる部位の皮下結締組織內の血行障害を來し、ために鬱血を起し更に進んで血性漿液性浸潤を起しため

第百五十一圖

右側顏頂骨に生ぜる頭血腫

に其部位が漸次腫瘤狀に腫脹するに到る、これを産瘤と云ひ(顏面部に生せる場合には特にこれを面瘤と云ふ)其生ずる部位は産道内に於ける胎兒の位置により殆んど一定し且つ初めより死亡せる胎兒には生ずることなし、これために血行障害を起すことなければなり。

面瘤

頭血腫

産道の抵抗更に强度ならんか遂には頭蓋骨の骨膜下血管が破裂出血しために骨膜下に血腫を生じ腫瘤を形成するに到る、これを頭血腫又は頭蓋血腫(第百五十一圖を見よ)と云ひ稀れに見るものなり、其産瘤との鑑別は初生兒編を參照すべし。

第八章　産科的消毒法

第一節　消毒法の必要なる理由

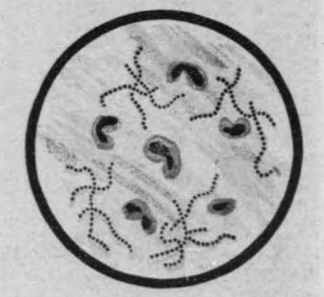
病原菌

分娩後卽ち産褥時に强き發熱を來し屢々褥婦(とは産褥にある婦人を云ふ)の生命を奪ふ恐ろしき産褥熱なる疾病は主として連鎖狀球菌(第百五十二圖を見よ)葡萄狀球菌(第百五十三圖を見よ)稀れに大腸菌淋毒菌(ぢふてり)菌等の細菌(これ等を病原菌と云ふ)の傳染繁殖により生ずる一種の傳染病なり。

以上の病原菌殊に連鎖狀球菌と葡萄狀球菌とは外界の到る所、例ば術者又は患者の身體殊に手指、衣服は勿論室内、寢具内等に散在し、一定の溫度と養分(例ば血液、創面よりの分泌液、羊水、其他の不潔なる排泄物)との下には非常によく傳染繁殖して其數を增し其部分の組織又は臟器を侵蝕破壞すると同時に非常に有害なる毒物を産出し血行によりて全身に分佈して以て褥婦の全身を著しく障碍するものなり、今妊娠、分娩及産褥を考ふるに妊娠時には生殖器殊に軟部産道は著しく鬆軟となり分泌增加し非常に傷き易くなる、次で分娩時には硬き兒頭と骨盤壁との間に强く壓迫され、又胎盤は子宮壁より剝離するあり、ために軟部産道は一つの大なる創面と變じここより多量の分泌物を出して以て上記病原菌の傳染繁殖に好都合の狀態となる、他方吾人が妊、産、褥婦を處置する場合に使用する器具、材料には一つとして上記病原菌の存在せざるものなし、故に若し吾人が次に述ぶる消毒法を嚴重に行はざれば極めて容易にこれ等病原菌が軟部産道の創

第百五十二圖

連鎖狀球菌



第百五十三圖

葡萄狀球菌

面に傳染し繁殖して恐るべき産褥熱を起すに到る、從うて吾人が其職務を完全に行はんとするには先ず第一に次に述ぶる消毒法を熟知しこれを嚴重に實行せざるべからず。

而して其實行法は次の諸點に留意するにあり。

一、術者自身の身體及衣服を常に清淨に保つこと。

二、患者の身體、衣服及寢具を清潔にすること、殊に

三、患者の生殖器及附近に直接に接觸する總ての物體例へば術者の手指、器械、繃帶材料等はこれを次に述ぶる消毒法(滅菌法又は殺菌法とも云ふ)によりて細菌の全く存在せざる狀態即ち無菌の狀態に於て使用すること。

消毒法

四、爾後絶えず細菌の傳染を豫防し(これを防腐法と云ふ)既に傳染の疑ひある者はこれを清潔にすること(これを制腐法と云ふ)。

防腐法

而して其消毒方法には　(甲)高熱を以てする理學的消毒法と　(乙)消毒藥を以てする化學的消毒法とあり、高熱を利用する場合は更に　一、煮沸消毒する場合　二、燒灼消毒する場合　三、蒸氣消毒する場合　四、高熱空氣を以てする場合とを區別し、消毒藥としては昇汞「リゾール」「リゾホルム」「クレゾール」「石鹼」「石炭酸」「アルコール」等を使用す。

制腐法

昇汞　は猛毒藥なるを以て注意して使用すべし、普通「フクシン」を以て着色して他の溶液と誤らざる樣にし且つ消毒力を强むるために少量の食鹽又は鹽酸を加へ金屬製の容器を避く、これ容易に腐蝕さるればなり、普通〇・二%即ち五百倍の溶液として使用す。

「リゾール」　は「クレゾール」を石鹼に溶解せるものにして一種不快の臭氣あり「リゾホルム」は其臭氣を善化せるもの、普通二%即ち五十倍の溶液として使用す。

石炭酸　は水又は溫湯を少しづつ加へ攪伴しつつ溶解す、普通二乃至五%即ち五十乃至二十倍の溶液として使用す。

「アルコール」　は五十乃至七十%のものが消毒力最も强く、無水又は純「アルコール」は消毒力微弱なり。

第二節　手指の消毒法

手指の消毒法は金屬製又は木製器械に於けるが如く高熱又は强き消毒液を使用することを得ざるを以て常に不完全なるを免れず從うて古來種々なる方法應用されしも皆一つとして完全なるものなし、現今にては次に述ぶるフュールブリンゲル氏法最も完全とせらる。

フュールブリンゲル氏法

フュールブリンゲル氏手指消毒法

一、兩腕を上膊まで露出し指爪を出來得るだけ短く剪み且つ爪鑢(第百五十四圖を見よ)を以て其切斷端を圓鈍ならしめ同時に爪床の間にある塵垢を出來得る限り充分に除去したる後清淨なる手術衣を着け、

第百五十四圖

爪鑵の圖

二、石鹸（これは軟石鹸卽ち加里石鹸又は綠石鹸を最良とすれども又普通石鹸にてもよし）**殺菌せる刷毛**（これは長さ十二仙迷、幅五仙迷の大さにて毛のなるべく硬きをよしとす「バキン」、棕櫚又は豚毛製等あり）及び堪へ得るだけ熱き（攝氏五十度內外）絕えず流出する殺菌水（若しこのなき時は湯を時々交換すべし）を以て手腕殊に指間、爪床其他皺襞に富む部位を注意して丁寧に洗刷すること十乃至十五分にして、なるべく熱き殺菌湯を以て石鹸を悉く洗去し、次で

三、七十乃至八十%（「アルコール」）**を以て一乃至二分摩拭し、**

四、微溫の二乃至三%（卽ち五十乃至三十倍）**の石炭酸水、一乃至二%**（百乃至五十倍）**の**「リゾール」**又は**「リゾホルム」**水、又は一・五%**（七十倍）**の石鹸**（「クレゾール」**水等の消毒溶液中にて少くとも三分間更に丁寧に洗刷して以て消毒を終る。**

手指消毒に關する注意

注意　以上の方法によるも尙ほ其消毒は絕對的ならざるのみならず全く一時的なるを以て必要あらば時々これを反覆し常になるべく其完全を期すべし、そのためには、

一、平素身體殊に手腕の清淨にして無傷なるに心掛け、なるべく傳染性の危險物體例は種々なる傳染病殊に產褥熱患者又は腐敗化膿せる物體例は浸軟腐敗兒、腐敗羊水膿或は產褥熱患者の惡露等に接するを避け、若しこれ等に接せる時は出來得べくんば四十八時間以內に於ては正規の妊、產、褥婦を取扱はざる樣にすべし、尙ほ平素皮膚の攝生に留意すべし、これを**豫防的**又は**前消毒法**と云ふ。

二、一度消毒せる部位はこれを乾燥せしめざる樣絕えず消毒藥液を以て潤すべし。

三、一旦消毒せる手指は絕對に他の消毒を行はざる物體に觸るべからず、若しその疑ひだに存せんか直に上記消毒法を初めより嚴重に行ふべし、而も不充分又は不完全を思はしむる場合には殺菌し無傷なる護謨手袋又は指囊を利用すべし。

第三節　妊、產、褥婦生殖器の消毒法

第一項　外陰部及其附近の消毒法

一、患者を仰臥位とし腰下に淸潔なる高き枕及便器を挿入し下肢を股及膝關節に於て強く屈曲せしめ且つ股間を充分に開かしめ、

二、術者は其股間又は右側に坐し、豫め充分に消毒せる手指を以て石鹸及微溫湯或は三%石炭酸石鹸溶液を使用し外陰部及附近を脫脂綿又は「ガーゼ」を以て充分に摩拭したる後、

三、殺菌水又は二%（五十倍）**石炭酸水或は一%**（百倍）**「リゾール」**又は**「リゾホルム」**水の多量を以て石鹸を充分に洗ひ落して消毒を終らば

四、其部を殺菌消毒せる「ガーゼ」又は綿を以て被ひ、再ひ傳染するを避け、且つ患者をして

其手指を茲に觸れしめざる樣に注意す。

第二項　內陰部殊に腟腔消毒法

一、先づ上述の方法によりて外陰部及附近を消毒したる後、術者はその手指を更に消毒し直し、

二、〇・一％(又は一‰即ち千倍)昇汞水、又は二％(五十倍)石炭酸水又は一％(百倍)「リゾール」水等の多量を滿せる浣水器即ち「イルリガートル」の嘴管を左手を以て握り其先端を腟入口に向て徐々に液を流出せしめつつ右手の示及中指を深く腟腔內に挿入し其全壁を隈なく洗拭すべし、此際特に腟穹窿部の消毒に努むべし、一般に腟腔の消毒は一、強き消毒藥を應用し得ざること、二、消毒液を吸收する危險あること　三、露出し明視することの困難なること、四、器械的消毒法を充分に行ひ難きこと等のため常に充分なる結果を得ざること多きを以て常に多量の消毒液を以て充分にこれを行ひ且つ洗滌液は充分に腟腔より流出せしむべし。

腟洗を行ふ場合

腟腔洗滌を行ふ場合　は次の時に限る、而れども若し上記の消毒法を完全に行ひ難き場合には寧ろ行はざるをよしとす。

一、內診又は腟式に手術又は其他の操作を行ひたる場合。

二、內診前既に他所に於て又は他人によりて內診されたるか又は膿性或は惡臭を有する分泌物の存する場合。

第四節　器械の消毒法

第一項　金屬性器械の消毒法

金屬製器械例ば、刀、剪刀、「カラーテル」等は煮沸消毒を最良とし就中シンメルブッシュ氏煮沸消毒器(第百五十五圖及百五十六圖を見よ)によるを至便とすれども場合によりては鍋、釜、湯沸の類を代用するも差支へなし。

方法　煮沸消毒器の八分目位まで水又は一乃至二％の曹達(重曹)水を盛り(曹達水を用ふる時は消毒完全なるのみならず銹を生ずる恐少し)これを沸騰せしめたる後この中に三乃至五分間留置すべし、但し刀及は其損傷を防ぐために綿を以て包み煮沸すべし、この際消毒器の蓋を密閉し泡沫の生せざる樣にすべし而らざれば液の溫度が器の上下によりて差を生じたために消毒の目的を充分に達し得ざることあればなり。

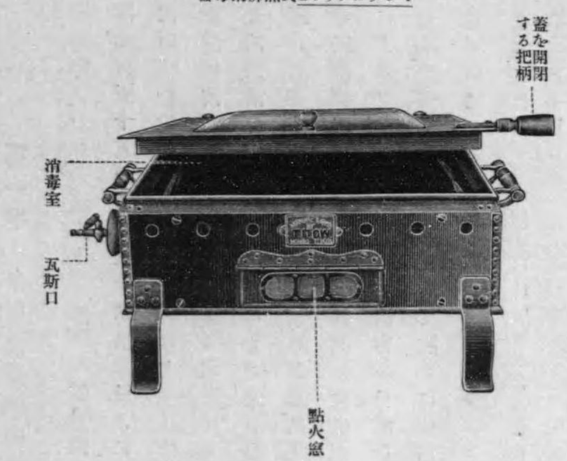
かくして冷殺菌水を以て冷却して直ちに使用するか又は三乃至五％石炭酸水中に貯へ用に臨みてこれを使用す。

坊間販賣する防疫用石炭酸中には鹽酸を含みたために金屬に銹を生ぜしむるを以て常に消毒用石炭酸を使用すべし。

突然に至急消毒を要する場合には　器械を「アルコール」に浸しこれを引き上げて直

第百五十五圖

シンメルブッシュ氏煮沸消毒器

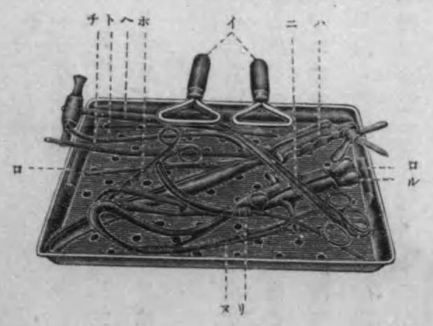


ちに點火燃燒すること兩三回なるべし。

浣水器の消毒法　これも煮沸するを最良とすれどもこれを行ひ得ざる場合には器中に水又は熱湯を盛りて煮沸するか若しこれを行ひ得ざる場合(硝子製)には三%石炭酸水又は一%「リゾール」水を以て充分に其內外面を洗刷したる後上記消毒溶液中に三十分以上浸したる後使用す。

第百五十六圖

圖は第百五十五圖煮沸器液中に入るる器械盆中に種々なる消毒すべき器械を入れたるなり



イ：はロなる取手に懸けて盆を沸騰液に出入せしむる把柄
ハ：碎頭器
ニ：麥粒鉗子
ホ：コッヘル氏止血鉗子
ヘ：斷頭鈎
ト：金屬性S字狀「カテーテル」
チ：子ラトン氏「カテーテル」
リ：ポーツェマン氏「カテーテル」
ヌ：流產鉗子
ル：鉗子

第二項　護謨製器械消毒法

五分間位の煮沸消毒を最良とすれども强く其質を損するの缺點あるを以て二、三分煮沸後〇・一%(又は一‰卽ち千倍昇汞水、五%石炭酸水、又は二%「リゾール」水中に長く貯へ、使用に際し殺菌水にて洗滌して使用す。

護謨手袋消毒法、　曹達溶液中にて煮沸するは簡單にして完全なれども其質を害すること大なるを以て、これを「ガーゼ」に包み蒸氣乾燥消毒を賞用す、この場合には其內面にも蒸氣の流通し得るために其中に綿を緩くつめ、若し多數を一時に消毒する場合には各個の間に必ず「ガーゼ」を置くべし、而らざれば熱氣のため互に相膠着して强き損傷を來すべし、又若し消毒後乾燥狀態にて使用せんとする場合には消毒前に豫め灼熱殺菌せる滑石末を入れ置くべし、かくせば消毒乾燥せる手指を容易に挿入し得るの便あり。

其他煮沸消毒を行ひ難き器械の消毒法、　は先づ石鹼と刷毛とを以て丁寧に洗ひたる後千倍の昇汞水、二十倍石炭酸水、五十倍「リゾール」水等を以て充分に洗拭せる後其中

に長く漬浸して貯ふべし。

第五節　繃帶、縫合、結紮材料及衣服の消毒法

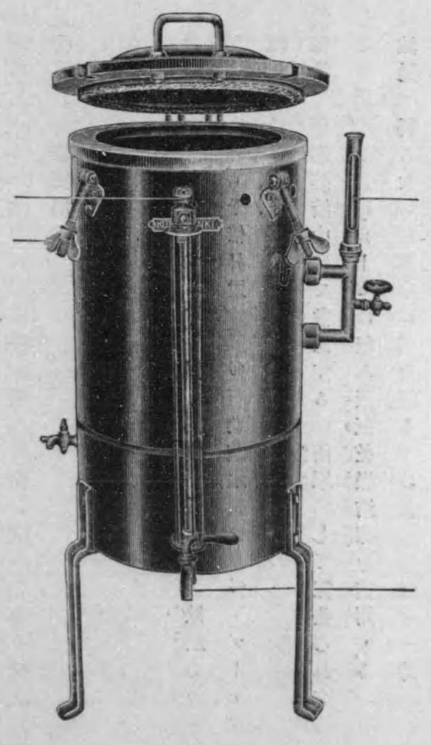
第一項　繃帶材料消毒法

コッホ氏又はシンメルブッシュ氏殺菌釜による蒸氣消毒法を最良とすれども亦場合によりては鍋釜の類を以て煮沸消毒するか又は蒸しても充分に消毒の目的を達し得るものなり。

左にシンメルブッシュ氏殺菌釜第百五十七及百五十八圖を以て蒸氣消毒を行ふ方法を述ぶべし。

第百五十七圖

シンメルブッシュ氏消毒釜の圖

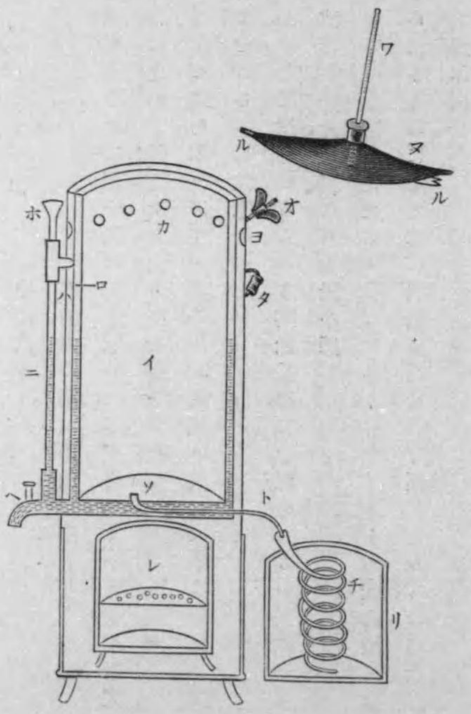


一、第百五十九圖に示す如き容器中に繃帶材料を輕くつめ蓋を閉ぢ(イによる)容器の側面又は底面にある蒸氣の入るべき孔を有する窓(ハ)を悉く開きこれを消毒釜の內鑵(イ)中に入れたる後釜の蓋(ヌ)を密閉し、次で

二、消毒釜の外鑵中に水又は湯を漏斗(ホ)によりて注ぎ釜の高さの半分以上まで入れ水

第百五十八圖

シンメルブッシュ氏消毒釜の橫斷面圖



(イ)消毒材料を入るる內罐
(ロ)水を入るる外罐
(ハ)最外壁
(ニ)外罐內の水の高さを知る硝子管
(ホ)水を注ぐ口
(ヘ)水を流出さする口
(ト)(チ)蒸氣を(リ)なる水槽に導く管
(ヌ)蓋
(ル)(オ)蓋を固定する裝置
(ヨ)罐內の溫度を知る寒暖計
(タ)外罐中の水が沸騰し其蒸氣が內罐內に進入する孔
(カ)
(ソ)
(レ)火爐

の高さは釜の傍にある硝子管中(ニ)の水の高さによりこれを知ることを得、次で

三、釜の下より熱(レ)を加ふれば暫時にして釜中の水は沸騰して蒸氣を發し、この蒸氣は釜の上部にある孔(カ)より内鑵中に入り消毒材料中に侵入して以てこれを消毒したる後其底面にある孔(ソ)より外部の水槽(リ)中に入る。

四、消毒時間は攝氏百度となりて盛んに蒸氣を發せしより同溫度の下にて三十乃至四十五分にて充分なり、かくして所定の時間消毒せば、

五、先づ水槽に連れる鉛管(チ)を去り、次で釜下の火爐(レ)を去り五乃至十分の後に蓋(ヌ)を開きて「ガーゼ」鑵を取り出すと同時に其蒸氣の入るべき孔を悉く閉鎖し爾後其内容の再び汚染せざる樣に注意すべし。

注意　一、かくして消毒せるものも其後長時日を經過せるか又は一度容器を開きたる後には消毒の効力確實なりと云ひ難し。

二、坊間販賣さるる消毒綿又は「ガーゼ」は多くは「サリチール」酸、硼酸又は昇汞等を浸し乾燥せしめたるものにして殊に製造後長時日を經過せるものは殆んど普通の消毒せざるものと選ぶ所なし。

第百五十九圖

繃帶材料消毒鑵の器

臍帶結紮絲
絹絲「てぐす」
腸線

一、臍帶結紮絲(普通麻を用ふ)は上記煮沸消毒によるべし。

二、絹絲及「てぐす」は純粹の水中にて二十乃至六十分煮沸し、これを昇汞「アルコール」(昇汞一に對し「アルコール」百)又は五%石炭酸水、〇・一%昇汞水又ハ五〇%「アルコール」中に貯ふ。

三、腸線　はこれを硝子板に卷き、ヨード、ヨード加里液(沃度一・〇、沃度加里一・〇、蒸餾水一〇〇・〇)中に八日間浸し置き用時三%石炭酸水又は殺菌水を以て沃度を洗去するか又は無水「アルコール」中に貯ふ。

第三項　衣服の消毒法

術者の術衣、手拭、產婦の上下着、肌着、腰卷、蒲團、敷布、下敷等はこれを煮沸又は蒸氣消毒を行ふを理想とすれども實際行ひ難き問題なるを以て只管其清潔を旨とし而も上記病原菌の附着し居るものと考へ取扱ふべし、卽ちこれ等の者が直接に外陰部に接觸せざる樣にし又消毒したる手指器械、繃帶材料等に觸れざる樣にし、若し觸れたる場合には直にそれ等のものを再び嚴重に消毒し直すべし、萬一產褥褸の如き不潔物を用ふるの止むを得ざる場合には先づ一旦これを熱湯、石鹼を以て清潔にしたる上、充分に煮沸消

毒して使用すべし。

第六節　制腐材料の製法

脱脂綿及精製「ガーゼ」の製法

一、脱脂綿及び精製「ガーゼ」の製法

水一斗に對し洗濯曹達二百匁を溶解し、之に綿又は「ガーゼ」を浸し煮沸して充分に脂肪分を取りたる後再三水洗して曹達を全く去り水分をなるべく充分に取り、次で「クロール」石灰液中に二、三分浸して脱色したる後、鹽酸を僅に加へて弱酸性を呈する水中にて清洗し更に千倍の次亞硫酸曹達液にて洗ひ、最後によく水洗し乾燥して貯ふ。

「ヨードホルム、ガーゼ」の製法

二、「ヨードホルム、ガーゼ」の製法

(イ)先づ「ヨードホルム」をなるべく細かに碎き「ガーゼ」に包みて二%昇汞水中に一晝夜漬してよく消毒し、

(ロ)製造に用ふる總ての器具、手指等を充分に消毒し且つ室内を清潔にし塵埃の立たざる樣にし、

(ハ)次の混合液を作り其中に「ガーゼ」を浸し液を平等によく浸み込ませたる後引き上げ日光を避けて乾燥せしめ無菌的に褐色硝子製容器内に納め日光を避けて貯ふ。

混合液處方

「ヨードホルム」	七五・〇瓦
「エーテル」	六〇〇・〇cc.
「リスリン」	一五〇・〇cc.
無水「アルコール」	三五〇・〇cc.

以上「ガーゼ」四反分

「ヴィオホルム」及び「キセロホルム、ガーゼ」の製法

三、「ヴィオホルム」又は「キセロホルム、ガーゼ」製法

以上と同一の方法により次の混合液を用ふ。

「ヴィオホルム、ガーゼ」用混合液處方

「ヴィオホルム」	一〇・〇瓦
乳糖	一〇・〇瓦
「リスリン」	二五〇・〇cc.
純「アルコール」	五〇・〇cc.
蒸餾水	五〇〇・〇cc.

以上「ガーゼ」一反分

「キセロホルム、ガーゼ」用混合液處方

「キセロホルム」	一〇〇・〇瓦
「リスリン」	五〇・〇cc.
「エーテル」	一〇〇〇・〇cc.

以上「ガーゼ」約二百二十匁分

昇汞綿

四、昇汞綿の製法　昇汞二分、「クロール、カリウム」二分　を蒸餾水千五百分に溶解し、之に脱脂綿千分を浸し平等に浸み込ましめ微溫を以て乾燥す。

「ヨードホルム」綿

五、「ヨードホルム」綿の製法　「ヨードホルム」五分、流動「パラヒン」五分　を「エーテル」九十分に溶解し、これに脱脂綿九十分を浸し平等に浸め込ましめ常溫にて乾燥す。

石炭酸綿

六、石炭酸綿製法　流動石炭酸六分　を酒精百三十分に溶解し、これに脱脂綿百分を浸し二十四時間の後常溫にて乾燥す。

硼酸綿

七、硼酸綿製法　硼酸十一分を蒸餾水百八十七分に溶解し、これに脱脂綿九十分を浸し二時間後壓搾し乾燥す。

第九章　分娩に關する諸診斷法

第一節　産婦診察法

大體に於て既述の妊婦診察法によるべしと雖も産婦診察に際し特に留意すべき諸點左の如し。

第一項　問診

産床に臨まば先づ直に

一、陣痛の存否　若し其存するならば其開始せる時日、其後の經過卽ち其度數、强度、發作及間歇の規則正しきか否か等。

二、破水の有無　若し其既に破水せるものにありては其時日、前羊水の性狀、量、其後に於ける經過殊に續きて羊水の漏出あるや否や等。

を詳細に尋問し、かくして陣痛あり、破水後なる場合には直に分娩に對する準備を行ふべく、之れに反し其未だ破水せざる場合には既述の産婦及び其家族の一般的既往症を尋問すべし。

第二項　現狀診察法

(甲)　外診

一、陣痛の存否　を檢し其既に存する場合には上述の問診をなしつつ其手掌を腹壁外より子宮體部に置き以て其强さ、回數、發作及間歇の性狀を精檢し、其間歇時に於て

二、(イ)子宮底の高さ、位置、壓痛の存否、(ロ)腹壁緊張の度、浮腫の存否。

(ハ)羊水の量　等に留意しつつ既述の診察實施法によりて、

(ニ)胎兒の位置及各部分を既述の特徴より推定して以て其胎位、胎勢、胎向を定め、

(ホ)胎兒の先進部の種類及びそが骨盤入口に進入し固定せるや否や、

(ヘ)胎動の存否、(ト)收縮輪の存否及其高さ、

等を精檢し、更に進んでは

三、兒心音、臍帶雜音、子宮雜音等の有無、部位、性狀等を聽取し必要あらば直に內診に移るべく、而らざれば、次で

四、產婦の全身狀態、

五、乳腺の診察に次ぐに、

六、身長、體重、最大腹圍及腰圍、骨盤其他を測定す。

(乙)　內診

內診はなるべく節約すべきは勿論なれども必要と認むれば直にこれを行はざるべからず、卽ち既述の方法によりて嚴重なる消毒法を行ひたる後、既述の內診實施法(第百四十四頁を見よ)によりて次の諸點をなるべく短時間にて而も完全に內診すべし、卽ち

一、外陰部に於ては、(イ)其狹窄、畸形又は病變の存否、(ロ)鬆軟の度、(ハ)伸展性の良否等。

二、內陰部に於ては、

(イ)腟腔の性狀　卽ち其廣さ、畸形の有無、鬆軟の度、伸展性の良否、病變の存否、壓迫症狀例ば腫脹、疼痛、乾燥、發熱、血腫等の存否及其程度及部位等。　(ロ)子宮口の大さ、形狀、位置、口唇の性狀　(子宮口の大さを云ひ表はすには(一)二乃至三指を通じ得るとか(二)五厘錢、一錢、二錢銅貨大とか、(三)直徑五仙迷とか云ふ)。　(ハ)子宮腟部乃至頸管の消失せるや否や、性狀、開大の度、

(ニ)下子宮部の性狀　先進胎兒部分との關係殊に前置胎盤の存否。

(ホ)子宮內容の性狀、卽ち、1.卵胞の存否(卵胞存在し其緊張せる時は緊滿せる薄き護謨囊の如く觸れ、弛緩せる時は弛緩せる護謨囊としてか又は皺襞を作れる卵膜として觸る、之れに反し卵胞存在せず卽ち破水後に於ては內指頭は直接に胎兒の先進部に接觸す)、大さ、緊張の度、卵膜の厚さ、前羊水の量及其漏出の存否、2.胎兒小部分又は臍帶の下垂乃至脫出の有無、臍帶搏動の存否、胎兒の產道內にのける位置、先進部の診定及其廻轉の模樣程度の正否、骨盤腔に對する關係の正否。

(ヘ)骨盤　の形狀、大さ、異常の存否、其存せんか、其部位及程度、　(ト)分泌物の性狀。

等を精細に檢査すべし。

問診及外診所見

第二節　分娩開始の診斷法

以下述ぶる症候のある場合には分娩開始と診定することを得。

(甲)問診及外診により、

一、既に分娩豫定日の前後に相當すること。

二、子宮底强く前下方に懸垂し初產婦に於ては兒頭既に骨盤入口部に進入固定し移動せざるか又は僅に移動すること。

三、初めは極めて不規則なる前驅陣痛なるも漸次規則的となり其强さ及度數の時と共

に增强すること。

四、子宮分泌物增加し且つ其中に少量の血液の混入すること。

(乙)内診により、

一、初產婦に於ては子宮腟部僅に存するか又は全く消失し子宮外口稍々哆開し、經產婦に於ては子宮腟部は尙ほ存するも頸管既に擴開し手指を通じ得ること(第百四十圖及第百四十一圖を見よ)。

二、更に確實なるは陣痛發作時に緊張し、間歇時に弛緩する卵胞を觸知すること。

内診所見

第三節　胎兒各部分の內診上の特徵

縫合

一、縫合

(イ)矢狀縫合　は左右兩顱頂骨間の間隙なれども分娩進み頭蓋骨の重疊を來すや多くは最早や間隙として觸れずして左右兩骨緣の相重層せる狀を呈し、更に進んでは其附近に產瘤を生じ、ために其全徑路を觸知し得ざることあり、かかる場合には其兩端にある大小顖門の位置によりて其徑路を想像するに止まる、而も場合によりては兩顖門を觸知し得ず、ために其診定の非常に困難にして時に不可能のことあり。

(ロ)前額縫合　は一端に大顖門を、他端に鼻梁を觸る。

(ハ)冠狀縫合　は一端に大顖門を、他端に耳を觸る。

縫合觸診時の注意

(ニ)後頭縫合　は一端に小顖門を、他端に耳の後部を觸る。

總て縫合を觸定せんとする場合には內指頭に力を多く用ひず、極めて靜かにし且つ鋸齒狀運動をなしつつ進むべし、而らざれば途中よりこれを失ふ恐れ有り。

顖門

二、顖門

(イ)大顖門　は矢狀縫合、冠狀縫合及前額縫合の相會合する所に生ずる菱形の窩なるも分娩進み骨重疊著明となるや菱形窩の全く消失すること稀ならず、かかる場合には上記四縫合の會合部を本顖門と心得べし。

(ロ)小顖門　は矢狀縫合と後頭縫合との會合部にして其附近に頭蓋中最も硬き後頭骨突起を觸知せば診斷更に確實なり。

(ハ)側顖門　は其附近に耳を觸知し其形狀極めて不規則なり。

三、頭部　は其硬度平等にして非常に硬く、上記縫合及顖門を觸れ、且つ頭髮を證明することを得。

頭部

四、前頭乃至前額部　は常に大顖門及前額縫合を觸れ、且つ一側に於て眼窩或は其上緣を、他側に於て頭髮の發生部を觸知す。

前頭及前額部

五、顏面部　は中央に鼻梁其附近に口腔顎部それと反對に眼窩を觸知す。

顏面部

(イ)鼻　は顏面部の中央に位し一つの隆起として存し比較的硬き軟骨及び二個の小鼻孔を觸れ、且つ其附近に口腔、眼窩を證明し得ること多し、但し面瘤により異形を呈す

ること稀ならざるを以て輕卒なる診斷をなすべからず。

(ロ)口は横裂にして舌あり、指を挿入するに生胎に於ては哺乳運動あり、且つ硬き上下相平行せる二個の硬き齒槽突起を證明す。

口と肛門との鑑別點

其肛門との鑑別は　肛門に於ては一、裂隙小にして横裂ならず、二、指を挿入するに生胎にありては括約作用あり、三、其際指頭に胎糞附着し、四、一側に於て生殖器を觸れ、他側に於て尾骶骨先端を觸る。

(八)頤部は馬蹄形の硬き下顎骨を觸れ其附近に口腔、他側に頸部を證明す。

臀部

六、臀部及其頭部との鑑別

臀部は一、頭部より小、二、柔軟にして硬度一樣ならず、三、表面凹凸不平にして、四、二個の同大柔軟なる半球體相併立し各々其中に硬き坐骨結節を觸れ、五、臀間溝の中央に肛門あり、六、決して毛髮を觸れず。

足と手との鑑別點

七、足と手との鑑別

一、趾は指に比し短く且つ其長さ殆んど同長なり、從つて其先端を結ぶ線は殆んど一直線をなし手に於ける如く弓狀ならず、二、指に於ける如く拇指と第二趾との間を強く擴開することを得ず、三、足蹠は、手掌より幅狹くして長く、四、硬き跟骨を觸れ、五足關節は蹠側屈曲運動不完全、六、生胎にありては刺戟により衝動樣運動をなす。

左右鑑別法

其左右の鑑別は

(イ)手に於ては　診者の手と握手し得る時は診者の手と同名手にして、之れに反する時は異名手なり。

(ロ)足に於ては　診者の足蹠と胎兒の足蹠とがその同名趾端に於て相一致して合はすことを得る時は診者の足と反對側即ち異名の足なり。

膝部

八、膝部は其特有なる形狀、移動性及膝蓋骨證明による。

腋窩

九、腋窩は一側に於て樑狀の上膊を、他側に於て胸壁の一部を觸れ常に頭側に向つて閉ぢ骨盤側に向うて開く。

胸廓は其容積大にして肋骨、肩胛骨、鎖骨等を觸知することにより容易に診定することを得。

第四節　胎兒先進下向部の骨盤腔に於ける高さ診定法

入口上の場合

一、先進下向部骨盤入口上に存在する場合

外診により該部分の骨盤入口上に容易に移動し固定することなく、內診により辛うじてこれに達し且つ容易に移動せしむることを得。

入口中の場合

二、骨盤入口部に進入せる場合

既に外診により其固定せるを認め、內診により其移動の多少困難なるを認む、而も內

指頭は容易に薦骨岬に直接に達することを得、而るに分娩更に進みて先進下向部の最大周圍部が

潤部の場合

三、骨盤入口部を過ぎ骨盤潤部に入るや

側坐骨棘を容易に觸知することを得、次で先進部の最大周圍が

峡部乃至出口の場合

四、骨盤潤部を過ぎ峡部に進入するや

最早や兩側坐骨棘を觸れず、かくして陣痛の增强すると共に胎兒下降し先進部が骨盤峡部を過ぎ骨盤出口に近づくに從うて初め尙は觸知し得たる尾骶骨先端も漸次これを觸れずして胎兒の先進部は陣痛發作時に陰裂間に顯出するに到る。

第十章　分娩時に於ける胎兒の位置

分娩時に於ける胎兒の位置は、これを胎兒の胎位によりて縱(直)位と斜位乃至橫位とに區別し、更にこれを其胎向によりて第一及第二胎向及び第一及第二分類に細別すること既に述べたるが如し、就中斜位乃至橫位は胎兒の異常胎位に屬し從うて自然分娩を遂げ得ること極めて稀なるを以て異常分娩編に於て詳述することとし茲には縱位に就てのみ述ぶべし。

縱位　はこれを其下向部の種類により

一、下向部が頭部なる時の頭位と　二、骨盤端なる時の骨盤端位とに區別し。

頭位　はこれを其骨盤腔內に先進する部分により一、頭蓋部の先進する頭蓋位、二、前額部の先進する前額位　三、顏面部の先進する顏面位を大別す、就中

頭蓋位　は兒の腦部が常に其胸部に接近せる胎勢を保つを以て一名屈位とも稱し其後頭部の先進する後頭位と前頭(又は前顱)部の先進する前頭(顱)位とを細別す、從うて頭蓋位卽ち屈位はこれを次の四種に細別することを得るものにしてブッシュ氏分類法と比較するに次の如し。

頭位

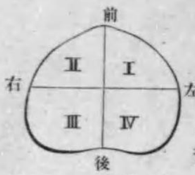
頭蓋位 屈位

ブッシュ氏分類法

第一後頭位(後頭位の第一胎向)＝第一頭蓋位
第二後頭位(後頭位の第二胎向)＝第二頭蓋位
第一前頭位(前頭位の第一胎向)＝第四頭蓋位
第二前頭位(前頭位の第二胎向)＝第三頭蓋位

以上の關係を記憶する便法　は第百六十圖に於て　圖は骨盤腔を下方より見てこれを四等分し、これに圖の如くI. II. III. IV. と符號し、內診の結果小顱門がI. 卽ち母體の左前方從うて大顱門が母體の右後方(III.)に觸る時は第一頭蓋位にして卽ち第一後頭位、小顱門がII. 卽ち母體の右前方從うて大顱門が左後方(IV.)に觸る時は第二頭蓋位にして卽ち第二後頭位、小顱門がIII. 卽ち母體の右後方從うて大顱門が母體の左前方(I.)に觸る時は第三頭蓋位卽ち第二前頭位、小顱門がIV.

第百六十圖



卽ち母體の左後方從うて大顖門が母體の右前方Ⅱ)に觸る時は第四頭蓋位卽ち第一前頭位とするにあり。

前額位及顔面位は頭蓋位に反し兒の頤は常に其胸部より遠ざかりたる胎勢を取るを以て兩者を總稱して一名反屈位とも云ひ、第一及第二胎向を細別するのみならず顔面位に於ては產道內を頤部の廻轉する方向により一、顔面位にして頤部が母體の前方に向ふ場合と　二、後方に向ふ場合とを細別す。

骨盤端位に於ても　其先進する部分により一、臀部の先進する臀位、二、膝部の先進する膝位　三、足部の先進する足位を大別し、臀位はこれを更に先進部が全く單に臀部なる場合の純臀位と臀部と同時に他の部分主として下肢の並存する場合の不純又は混合臀位とを區別し、膝位及足位はこれを其一側のみ先進する不全膝位又は足位と、兩側共に先進する完全膝位又は足位とを細別す。

依て分娩時に於ける縱位は次の如く分類することを得。

- 縱位
  - 頭位
    - 屈位
      - 後頭位（第一後頭蓋位……第二後頭蓋位……第二頭蓋位）
      - 前頭位（第一前頭位……第四頭蓋位……第二前頭位……第三頭蓋位）
    - 反屈位
      - 顔面位
        - 顔部前方に向ふ顔面位（第一胎向、第二胎向）
        - 顔部後方に向ふ顔面位（第一胎向、第二胎向）
      - 前額位（第一前額位、第二前額位）
  - 骨盤端位
    - 臀位
      - 純臀位（第一胎向、第二胎向）
      - 混合臀位（第一胎向、第二胎向）
    - 膝位
      - 不全膝位（第一胎向、第二胎向）
      - 完全膝位（第一胎向、第二胎向）
    - 足位
      - 不全足位（第一胎向、第二胎向）
      - 完全足位（第一胎向、第二胎向）

以上中後頭位が最も多く吾人の遭遇するものにして且つ其他の胎位に比し分娩最も容易從うて母子の危險最も少きものなるを以て之を分娩時に於ける胎兒の生理的位置と云ふ。

第十一章　正規分娩に於ける分娩機轉

定義

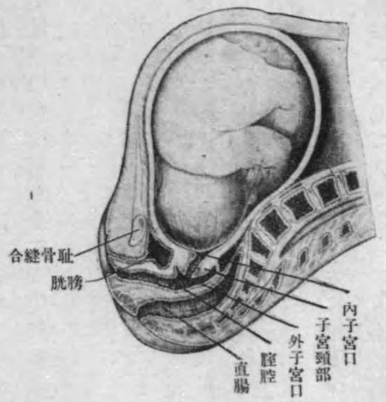
正規分娩に於ける分娩機轉とは、正規產に於ける胎兒及其附屬物主として頭部及肩胛部が次の四廻轉をなしつつ產道を通過し娩出さるる模樣を云ふ。今左にこれを後頭位に就て說明すべし。

第一廻轉　陣痛開始し胎兒が下方に壓下せらるるや兒頭は骨盤入口に進み矢狀縫合は其橫徑に一致して入り、初めは大小顖門殆んど同高を保つも漸次陣痛の增强する

第二廻轉

第百六十一圖

第一後頭位に於ける第一廻轉



に從うて特に後頭部が強く壓下されたために顱部が著しく胸部に接近して以て小顱門が大顱門よりも深く下方に入り、卽ち低位を取りて先進するに到る、これを第一廻轉又は第一胎勢廻轉と云ふ(第百六十一圖を見よ)。

第三廻轉

第二廻轉　分娩更に進むや兒頭は其先進せる小顱門を常に母體の前方に推移する樣徐々に廻轉を營みつつ下降するために初め骨盤入口部にて其斜徑に一致し、骨盤峽部乃至出口に到るや其前後徑に殆んど一致し、小顱門(卽ち後頭部)は恥骨縫合の方卽ち母體の前方)に、大顱門(卽ち前頭部)は薦骨窩の方(卽ち母體の後方)に向うに到る、これを第二廻轉又は第一胎向廻轉と云ふ。

第三廻轉(第百六十二圖を見よ)、次で排隔撥露し兒頭將さに娩出せんとするや、項部は恥骨縫合の後緣に、小顱門は恥骨縫合の下緣に支定され、顱部が再び胸部より遠かりて、以て前頭、顏面顱部の順序を以て會陰の方より娩出し、最後に後頭が恥骨弓下より娩

第四廻轉

肩胛部の分娩機轉

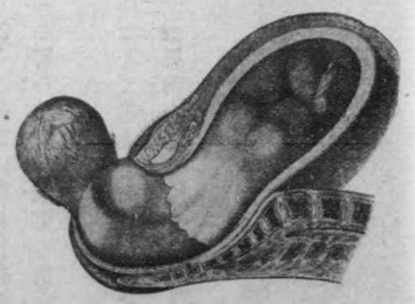
第百六十二圖

後頭位に於ける兒頭撥露の狀況を示す

第百六十三圖

第一後頭位に於て第四廻轉の完成せる狀況を示す

頭部と頭部とが完全に娩出し兒の顏面は母體右側大腿の內面に向ふ



して以て兒頭全く陰裂外に露出す、これを第三廻轉又は第二胎勢廻轉と云ふ。

第四廻轉(第百六十三圖を見よ)、かくして兒頭全く娩出するや、次で肩胛部が次に述ぶるが如き廻轉をなしつつ產道を下降するために兒頭は母體外に於て肩胛部の廻轉に應じて廻轉す、卽ち娩出當時母體の後方に向へる兒の顏面は漸次其側方に廻轉して母體大腿の內側に向ふに到る、これを第四廻轉又は第二胎向廻轉或は外廻轉と云ふ。

肩胛部の分娩機轉

兒頭の全く娩出せる當時卽ち上記第三廻轉の終りに於て肩胛部は骨盤入口部に在

肩幅

り其肩幅(又は肩胛横徑とも云ひ兩肩峰を結ぶ直線を云ふ)は入口部の横徑線に一致して入り以後肩幅は骨盤濶部に於ては其斜徑線に一致し但し矢狀縫合の一致せる斜徑線と反對の徑線に一致す、これ肩幅と矢狀縫合とは生理的に互に直角に相交叉するを以てなり)骨盤峽部乃至出口に於ては其前後徑に一致する樣廻轉しつつ下降し、其娩出せんとするや前在肩胛部(卽ち耻骨縫合の方にある、卽ち母體の前方に在る肩胛部)は耻骨縫合の下緣に支定され軀幹が多少前上方に屈彎するが如き廻轉をなしつつ後在肩胛部(第一後頭位にては左側肩胛、第二後頭位に於ては右側肩胛)が先づ會陰の方より娩出し、次で前在肩胛部娩出して茲に肩胛部の娩出を終る、但し肩胛部は頭部に比しては小なるのみならず柔軟にてよく壓縮せらるるために其廻轉の模樣は頭部に於けるが如く必ずしも規則的ならず。

軀幹及四肢の娩出

軀幹及四肢の娩出　は既により大なる頭部及肩胛部によりて產道が充分擴開せらるるため何等の抵抗を受くることなく、從うて特別の分娩機轉を營むことなくして肩胛部の娩出に次で容易に行はる。

第一後頭位の診斷

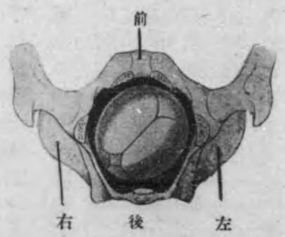
(甲)診斷　は次の諸點によるべし(第百六十四圖を見よ)。

第十二章　後頭位の診斷、分娩機轉

第一節　第一後頭位の診斷及分娩機轉

外診所見

第百六十四圖
第一後頭位
上圖は其外診所見
下圖は其內診所見
小顱門は左前方、大顱門は右後方に在り、矢狀縫合は第一右斜徑線に一致す



內診所見

一、外診所見　としては

(イ)頭部　は骨盤入口上にあり。

(ロ)臀部　は子宮底部にて稍々其左側に位し、

(ハ)兒背　は母體の左側に存し、

(ニ)小部分　は母體の右側にて上方に位し、

(ホ)兒心音　は左臍棘線の中央の附近に於て最も明瞭にこれを聽くが分娩の進むに從うて漸次に正中線に近づき且つ下方に降る。

二、內診所見　としては

(イ)小顱門　は低くして(先進して)母體の左側又は左前方に在り、

(ロ)大顱門　は高くして母體の右側又は右後方に在り。

(ハ)矢狀縫合　は骨盤入口部にては其橫徑に濶部にては其第一斜徑に峽部乃至出口にては其前後徑に一致して觸る。

產兒所見

三、產兒所見　としては

第一後頭位の分娩機轉

入口の横徑に一致しつつ其内に入り同時に第一廻轉を營みて小顔門を先進せしめ、次で第二廻轉により小顔門は常に母體の前方に向うて廻轉しつつ兒頭下降す、ために矢狀縫合は骨盤溝部に於ては其第一斜徑に、骨盤峽部乃至出口に於ては其前後徑に一致し、陰門を出でんとするや第三廻轉によりて前頭、顏面、頤部が逐次會陰より、最後に後頭が耻骨弓下より娩出して以て兒頭全く娩出するや、肩胛部の分娩に移り該部の產道内に於ける下述の廻轉の結果として兒頭第四廻轉をなし兒の顏面は母體右側大腿の内面に向く、骨盤入口部に於て其肩幅を横徑に一致せしめて入りたる肩胛部は其下降するに從うて軀幹の縱軸廻轉によりて右肩胛下降して母體の前方に向ひ、左肩胛後方に向ひ、ために其肩幅は骨盤溝部に於ては其第二斜徑に、峽部乃至出口に於ては其前後徑に一致するに到る、次で肩胛陰門に達すれば右肩胛耻骨弓下に支定され、兒の軀幹は前後軸の廻轉をなして以て先づ左肩胛會陰の方より、次で右肩胛耻骨弓下卽ち母體の前方より、娩出して以て肩胛部の分娩を終る。

第百六十五圖

後頭位なる兒頭の娩出せるを示す（長顏頭形）

線は變形の前後徑を示す

點は正常の頭形なりしを示す

（イ）產瘤　は右顏頂骨の後部に生じ、（ロ）骨重疊　は左顏頂骨緣が右側の下に層重す。

（ハ）頭形（第百六十五圖を見よ）　は其大斜徑線の方向に於て延長し、小斜徑線の方向に於て短縮して以て長頭顏形をなす。

（乙）分娩機轉

分娩開始するや兒頭下降し其矢狀縫合を骨盤

第二後頭位の診斷

第二節　第二後頭位の診斷及分娩機轉

（甲）診斷　は次の諸點による（第百六十六圖を見よ）。

一、外診所見　としては

（イ）兒頭　は骨盤入口上にあり、（ロ）臀部　は子宮底部にて稍々右方に位し、

（ハ）兒背　は母體の右側に存し、（ニ）小部分　は母體の左側にて上方に位し、

（ホ）兒心音　は右臍棘線の中央の附近に於て最も明瞭にこれを聽取す。

二、內診所見　としては

（イ）小顏門　低く先進し母體の右側又は右前方に在り、

（ロ）大顏門　高くして母體の左側又は

第百六十六圖

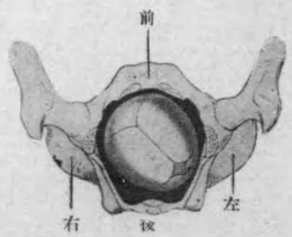
第二後頭位

上圖は其外診所見

下圖は其內診所見

小顏門は右前方、大顏門は左後方にあり

矢狀縫合は第二（左）斜徑線に一致す



は左後方に在り。

(ハ)矢狀縫合　は骨盤入口に於ては其横徑に、溝部に於ては其第二斜徑に、峽部乃至出口に於ては其前後徑に一致して觸る。

三、産兒所見　としては

(イ)産瘤　は左顱頂骨の後部に生じ、(ロ)骨重疊　は右顱頂骨緣が左側の下に層重す、

(ハ)頭部の變形　は第一胎向と同じく長頭顱形をなす。

第二後頭位の分娩機轉

(乙)分娩機轉

大體に於て第一後頭位の場合と同じ只其胎向の異るために胎兒部分と産道の前後左右の關係を異にするのみ、

今其異る點を列擧すれば次の如し。

一、第二廻轉に於て小顱門は右又は右前方より前方に廻轉すること、從うて矢狀縫合が骨盤溝部に於て第二斜徑線に一致すること。

二、第四廻轉に於て兒の顏面が母體の左側大腿の內面に向くこと。

三、肩胛部の娩出は(イ)肩幅が溝部に於て第一斜徑線に一致すること、(ロ)右側肩胛が先づ後方より娩出し、次で左側肩胛が前方より娩出すること

後頭位の豫後

(丙)豫後　後頭位の豫後は總ての他の胎位に比し最も佳良なり、これこの胎位に於ける先進頭部の最大周圍は兒頭周圍中最小なる小斜徑周圍(約三十二仙迷)なるを以て最も容易に産道を通過し且つ陰門殊に會陰の損傷を來すこと最も少ければなり。

第十三章　正規分娩の處置

正規分娩は普通自然に經過し從うて助産婦の處置すべきものなれども亦忽ちにして異變を起し時期を失せんか胎兒のみならず母體の不幸を來すことあるを以て常に周到なる注意を怠らず變に際しては時期を失せずして專門醫の補助を受くる樣心掛くべし。

第一節　分娩時助産婦の携帶すべき器械及材料

助産婦用器械及材料として備ふべきものは

一、診察用器械としては(イ)聽診器(第百十圖)(ロ)檢溫器(第百六十七圖)(ハ)骨盤計(第百十一圖)(ニ)卷尺(第百十二圖)

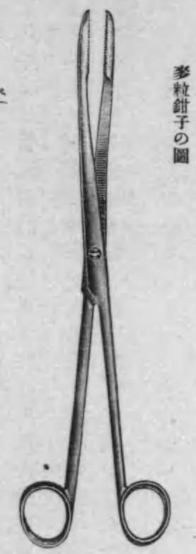
二、消毒用器械及材料としては(イ)爪剪刀(ロ)爪鑢(第百五十四圖)(ハ)刷毛(ニ)石鹼(ホ)消毒液(「リゾール」、「リゾホルム」、石炭酸「アルコール」、沃度丁幾等)(ヘ)液量器、

三、處置用器械及材料としては(イ)浣水器(第百二十三圖)(ロ)浣腸器(産婦用及初生兒用)(第百二十二圖)(ハ)剪刀(ニ)「ピンセット」(第百六十八圖)(ホ)麥粒鉗子(第百六十九圖)(ヘ)

第百六十七圖
沐浴用檢溫器の圖

第百六十八圖
解剖「ピンセット」の圖

第百六十九圖
麥粒鉗子の圖



第百七十一圖
金屬製S字狀尿道「カテーテル」の圖

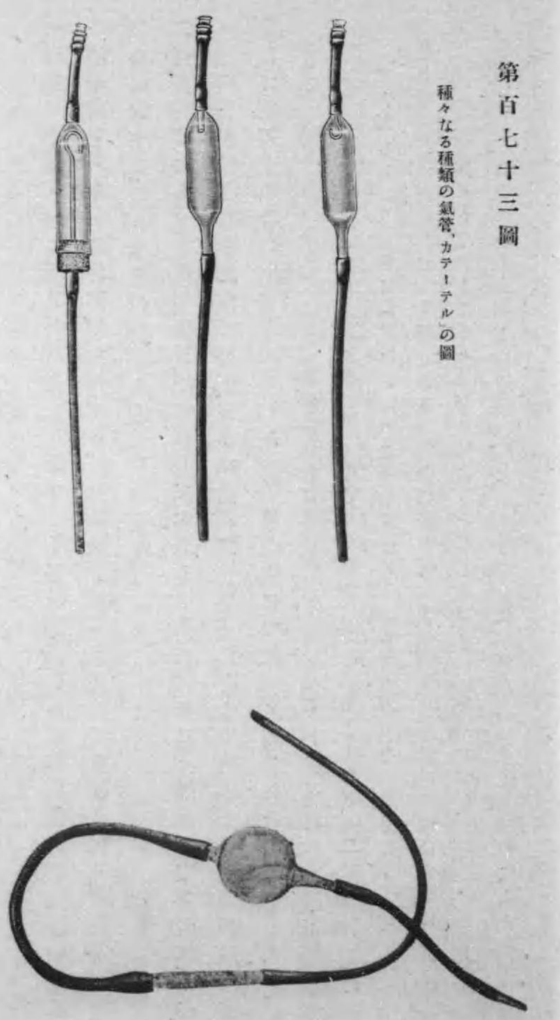
第百七十一圖
ホラトン氏尿道「カテーテル」の圖

第百七十二圖
臍帶剪刀の圖

第百七十二圖
臍帶剪刀の圖

第百七十二圖
ペアシン氏止血鉗子の圖

第百七十三圖
種々なる種類の氣管「カテーテル」の圖



(ヘ)止血鉗子(第百七十圖)　(ト)「カテーテル」(第百七十一圖)　(チ)臍帶剪刀(第百七十二圖)　(リ)氣管「カテーテル」(第百七十三圖)　(ヌ)臍帶結紮絲　(ル)消毒繃帶材料　(ヲ)護謨布・桐油紙・手術衣・手拭　(ワ)ホフマン氏液　(カ)二%硝酸銀水及點眼裝置　(ヨ)等分亞鉛華澱粉又はシッ

カロール」

等にしてこれ等は一定の順序にて一定容器内に納め携帶運搬に便利なる樣製造販賣せらる。

第二節　分娩の準備

一、産家の準備すべき器具及材料　としては(イ)手洗鉢三個、内二個は溫湯を入れ、一個は消毒液を入る、(ロ)沐浴用大「たおる」、(ハ)腰枕　(ニ)差込便器　(ホ)初生兒及産婦用衣類、豫め溫むべし、(ヘ)多量の熱湯及冷水　等なり。

産室

二、産室　はなるべく廣く、閑靜、清潔にして光線の射入及空氣の流通よき室を選び、不必要の器具はこれを他室に移し、室溫は攝氏二十度(華氏七十度)内外とし、夜間の照明充分にて便所下水等の惡臭の入らざる一階目の室にて且つ無用の人を出入せしめず。

溫室法

溫室法に就て　一、炭火により溫室する場合には炭が充分赤變せる後に室内に入るべし、而らざれば有害なる酸化炭素瓦斯が多量に發散し頭痛、惡心、嘔吐等を來すことあり、二、室溫の昇るに從うて空氣が乾燥したために頭痛、肋膜、咳嗽等を起すを以て絶えず水蒸氣を發散せしむべし。

換氣法

換氣法に就て　新鮮なる空氣を入るる場合に氣溫(とは大氣の溫度々云ひ其源は太陽にして寒暖計を以て測る)と室溫とあまり差なき時には早朝窓を開き夜間閉鎖すべし、且際開閉する窓はなるべく患者に遠きを選ぶべし、寒冷の時期に於ては隣室に空氣を入れ少し宛病室に入るる樣にすべし。

産床

三、産床　は廣き室なれば其中央に置き、狹き室なれば其足端を最も明き側に向けて三方より近寄り得る樣に置き、寧ろ硬き清潔なる蒲團を選び、其上に護謨布又は桐油紙及清潔なる敷布を敷き、更に腰部には清潔なる脫脂綿及び「ガーゼ」の數層を置きて分娩時臥床の汚染するを防ぐ。

産衣

四、産衣　は清潔にして寬濶なるものを用ひ、あまり厚着せしめず、殊に分娩時には發汗し易く且つ羊水、血液等にて汚染するを以て寧ろ薄着とし、若し冬季なれば分娩月股引を着けしむ。

産位

五、産位　各地の習慣により一定せざれども現今一般に應用さるるは仰臥位と側臥位となり、産婦壯健にして分娩全く正規に經過する場合には産婦の好みに應ずるも差支へなけれども、分娩第一期に於ては半臥位(上體を擧げたる仰臥位第二及第三期に於ては水平仰臥位を取るを以て最良となす。但し急速分娩する恐ある場合又は斜位を取らんとする恐ある場合等に於ては側臥位を取らしむべきなり、而も其側臥は急速遂娩の恐ある場合には最も先進せる部分の偏在せる側を下にして側臥せしむべく(故に第一後頭位に於ては左側臥位、第二後頭位に於ては右側臥位とす)斜位を取らんとする場合には兒頭の偏れる側を下にして側臥せしむべし。

第三節　正規分娩各期に於ける處置

第一項　分娩第一期に於ける處置

運動

一、運動　初產婦の分娩最初期にて陣痛未だ不規則、且つ微弱なる時期には室內又は室外の散歩は却て陣痛を强むる助となるを以て寧ろ奬べきなれども、既に子宮口開大せる場合、又は經產婦にて腹壁弛緩せるもの、又は急速に遂娩する習慣ある者は必ず產床に靜臥せしむ、これ卵胞が早期に破裂し、羊水早期に流出し、同時に臍帶又は小部分の脫出又は急速遂娩等を起し胎兒は勿論、母體の生命を危險ならしむることあればなり。

排便、排尿

二、排便排尿　分娩時に糞便が蓄積する時は屢々陣痛又は腹壓の微弱を起して分娩を困難ならしめ、又排臨、撥露の前後に不隨意的に排泄して消毒を不完全ならしむる不快あるを以てこれを充分に排泄することは分娩の始終を通じて非常に必要なること、なり、殊に分娩初期に於ては必ずこれが充分なる排泄を謀るべし、卽ち出來得べくんば自然的に、場合によりては人工的に導尿、又は浣腸によりてこれを行ひ、分娩最初期に於ては注意して便所に行かしめても宜敷けれども子宮口の既に開大せるを思はしめし場合には必ず床上にて仰臥位に於てこれをなさしむべし、

導尿法

導尿法　導尿を行ふには「カテーテル」を使用す「カテーテル」には金屬製S字狀「カテーテル」第百七十一圖を見よ）とネラトン氏「カテーテル」第百七十一圖を見よ）とあり。

實施法　一「カテーテル」を消毒藥を以て其內外面を洗滌したる後充分に消毒し、

二、患者を仰臥位とし下肢を股及膝關節にて屈け、且つ股間を開かしめ、

三、術者は患者の股間又は右側に坐を占め、豫め嚴重に消毒せる左手の拇及示指を以て陰脣を靜かに充分に左右に開きて腟前庭部を明に露出し、右手に消毒液を浸したる脫脂綿を取り靜かに外尿道口の周圍を消毒し、次で

四、豫め充分に消毒せる「カテーカル」を握り其先端に消毒せる「ワゼリン」又は二%の石炭酸「オレーフ」油を塗り、靜かに尿道より膀胱內に挿入す、

五、かくして尿の流出するに從うて左手を以て（又は助手をして）膀胱部を靜かに壓迫して充分に排尿し、

六、「カテーテル」抜去に際しては其外端を右手を以て、ネラトンならば管腔を壓縮し、金屬製ならば指頭を當てて管腔を塞ぎたる後靜に抜去し、次で膀胱部に當てたる左手を去る、而らざれば膀胱內に外氣の進入する恐あり。

浣腸法

浣腸法　に關しては第百六十頁を見よ。

腹壓

三、腹壓　は既に述べたる如く分娩第二期に來り、主として胎兒の排出を司るものなるが、時に分娩第一期に既に來ることあり、ために却て早期破水、又は產婦の疲勞等を起すを以て必ずこれを嚴禁すべし。

診察

四、診察　はこれを周密に行ふべきは勿論なれども、そのために却て母體に障害を來さざる樣留意すべし、卽ち內診の如き一般に此期に於ては其必要を見ざること多きを以て眞に止むを得ざる必要時に限り、消毒を嚴重にし短時間に行ひ且つ卵胞を破らざ

る樣注意すべし、外診の如きも濫りに行はんか陣痛の異常、早期破水の原因をなすを以て必ず陣痛間歇時に於て靜かに行はざるべからず。

五、產婦の慰安　殊に初產婦に於ては以後の分娩經過其他に關し多大の不安を感するものなるを以てこれが慰安に努むべし。

六、飲食物　總て分娩時の飲食はこれを一時に多量與ふべからず、消化性流動性の食物、無刺戟性の飲料を少量宛與ふべし。

七、兒心音の聽取　兒心音は胎兒生死を知る唯一の徵候なるを以て時々これを聽取し、傍ら臍帶雜音の存否を注意すべし。

八、陣痛の性狀　陣痛の正否は本期に最も大切なる關係を有するを以て其發作、間歇の正否を絕えず注視し時と共に增强する樣努むべきなり、而しども時に產婦睡眠に陷りために陣痛の微弱乃至休止することあり、かかる場合に若し他に何等憂ふべき危險症候なからんか寧ろこれを助け充分に安眠せしむべし、ために覺醒後元氣恢復して陣痛の性狀著しく改善するの利あればなり。

九、其他產婦の一般狀態　殊に體溫脈搏呼吸及子宮分泌物の性狀を注視し異變に際して時期を失せず醫治を乞ふの用意なからざるべからず。

檢溫法附檢溫器　檢溫器には攝氏列氏及華氏の三種あるが攝氏が最も賞用さる、攝氏の溫度を他の兩氏の溫度に換算するには次の式によるべし。

檢溫法
檢溫器

（華氏の度×4）÷5＝列氏の度
（列氏の度×9）÷5）＋32＝華氏の度

檢溫法　は普通腋窩にて行ひ特別の場合に口腔、直腸又は膣腔にて行ふ、今腋窩に於ける場合を述べん。

一、乾きたる布片にて腋窩を充分に拭ひ乾し、

二、檢溫器の上端を右手に握り手腕と共に振り下けて水銀柱を三十五度以下に下ぐ、次で

三、その水銀球部を腋窩の中央に挿入し胸壁及上膊を以てこれを固定せしめ、

四、十分間經過せる後挿入したるまま一度溫度を檢し其最高度を記憶し置き、更に其まま三分間放置し再び前の如く其度を檢し、前後殆んど同一なる時はこれを眞の體溫とすべく、若し初めの度と差異ある時は更に三分を經て得たるものを眞の體溫となす。

五、檢溫後は昇汞水又は「アルコール」を以て檢溫器を消毒す。

體溫及熱に就て　健康なる人の體溫は攝氏三十六乃至三十七度にしてこれを平溫と云ひ、三十七度以上三十八度五分に到るを輕熱、四十度以上を高熱と云ひ、之れに反し三十六度以下を低熱と云ふ。尙ほ一日中の體溫の差攝氏一度以下なる時は稽留熱と云ひ之れに反し一度以上の時は弛張熱と云ふ、又發熱が數時間だけに限る時はこれを間歇熱と云ふ。

檢脈法　撓骨下端の拇指側に輕く手を按し、他手に時計を取り一分間の數、規則的なりや否や、緊張の良否等を診定す、若し脈搏非常に弱き時は左側乳房下約三指橫徑の所に手を輕く當てて心搏動を檢すべく、それすら觸れざる時は耳を心臟部に當て其心音を聽くべし。

呼吸測定法　呼吸には專ら胸部を以てする胸式と、專ら腹部を以てする腹式とあり　婦人は主と

體溫及熱
檢脈法
呼吸測定法

して胸式呼吸を營む其數は健康成人に於ては一分間に平均十八回にて脈搏四に對し呼吸一の割合なり、これを測定するには胸上又は心窩部に輕く一手を按し他手に時計を取り其一分間の數、呼吸式、規則的なりや否や、深淺の度等を診定す。

破水時の注意

第二項　分娩第二期に於ける處置

一、破水時の注意　破水直前に於ては破水時に前羊水散亂して產衣其他を汚染せざるために消毒せる「ガーゼ」片を陰門の前に懸垂すべし、次で破水到らば一、其時間　二、前羊水の性狀及量を注視し、三、直ちに兒心音を聽取し、若し異常あらんか直に內診し主として臍帶の脫出の有無を檢し傍ら既述の內診時診定すべき諸點を檢すべく、之れに反し異常なくんば決して內診を行はず。

二、兒心音　は破水後に於ては其前に比して臍帶の壓迫さるること多く從うて其異常を來し易きを以てなるべく頻回に聽取すべし。

三、陣痛及腹壓　本期は兒頭が小骨盤腔內にて强く壓迫されつつ狹き產道を通過する最も危險なる時期なるを以てなるべくこの時期を短縮する樣に謀らざるべからず、而してそのためには種々の方法あれども主として娩出力を正强ならしむるにあり、卽ち產婦の一般的元氣を亢進せしむると共に適當なる位置卽ち下肢を少しく屈曲してこれを固定し、兩手に產綱を與へて把持牽引せしめ、陣痛發作時に於て强く腹壓を加へ、しめ、之れに反し間歇時には全くこれを嚴禁して以て無益の疲勞を避くべし。

會陰保護の時期

四、脫肛豫防　兒頭深く下降し會陰强く膨隆し直腸粘膜が肛門外に飜轉するに到らば消毒「ガーゼ」又は脫脂綿を以て肛門部を押へ殊に陣痛發作時には適當なる反壓を加へ以て脫肛（とは直腸粘膜が肛門外に脫出するを云ふ）を豫防し傍ら會陰の伸展を助く。

五、會陰保護　次で兒頭排臨に及べば會陰は益々膨隆し强く伸展し破裂の危險增加するを以て時期を失せずして後述する方法によりて會陰保護術を行ふべし、而して其時期に關しては各場合により一定し難けれども大凡經產婦に於ては排臨の時より、初產婦に於ては撥露の時よりこれを行ふを通則となす、其際に於ては產婦をして腹壓を加へしめず廣く開口し高く「アー」と叫ばしめ以て兒頭が陰裂間を徐々に通過する樣努むべし。

六、兒頭娩出直後に於ける處置

(イ)かくして兒頭娩出せば直に清潔にして軟かなる布片を以て口、鼻及其周圍を拭ひ、羊水粘液、血液等を去りてこれを吸入せしめざる樣にし、直に

(ロ)頸部に臍帶纏絡の有無を檢し（纏絡は五、六回の分娩に一回位の割に來る）若し其存せんか直に拇、示兩指間に輕く挾みてこれを弛め且つ兒頭を越えて外すべく、若し纏絡緊密にして外すこと困難ならんか任意の二ヶ所にて結紮し其中間を切斷すべきも至急を要する場合には助手をして二ヶ所を强く指壓せしむるか又はコッヘル氏止血鉗子

を以て挾みて其中間を切斷し速に胎兒の娩出を謀るべし。

七、肩胛部娩出　兒頭娩出するや其他の部分は普通續いて又は次の陣痛發作により容易に娩出するものなれども時に其娩出に時を費したために兒の顏面「チアノーゼ」を呈し胎兒の危險切迫することあり、又は臍帶纏絡のため速かに胎兒を娩出せしむる必要あることあり、かかる場合には次に述ぶる肩胛部挽出術を行ふべし、而して其際には同時に會陰保護を充分に行ふことを忘るべからず、これ屢々實地に於て兒頭娩出に際し會陰破裂を免れ得たるに安心し保護を怠りたために却てこの際强き損傷を來すこと稀ならざればなり。

八、胎兒娩出直後に於ける處置　かくして胎兒娩出し終らば

(イ)更に再び口、鼻及其周圍を清拭したる後羊水、血液等にて汚染せざる樣、而も臍帶を牽引せざる樣注意して母體の股間に冷却せしめざる樣にして靜臥せしめ、

(ロ)規則正しき呼吸を營むや否やを檢し其異常なきを知らば、直ちに

(ハ)子宮の收縮狀態を注意し其固く收縮するを知らば

(ニ)再び會陰其他に裂傷の存否、出血の存否を注視し

(ホ)時々臍帶の搏動を檢し其全く停止せる後直に以下述ぶる方法によりて臍帶を切斷すべし。

會陰保護術

會陰保護術は助產婦に最も必要なる技術なるを以て以下述ぶる方法によりて常に充分なる熟練をなすべし

會陰保護の目的　は會陰破裂を防護するにあるものにしてこの目的を達するには以下述ぶる方式によりて一、會陰及腟口の伸展を助くると同時に　二、兒頭の正規的廻轉(第三廻轉)を助け且つ其陰門通過を出來得る限り徐々ならしむるにあり。

會陰保護實施法　には次の二種あり、

(甲)仰臥位に於ける會陰保護法

一、產婦の位置、姿勢　產婦はこれを仰臥位となし、腰下になるべく高き枕を入れ以て會陰に手を達し易からしめ且つ兩下肢を股及膝關節にて强く屈曲し加ふるに股間を充分に開かしめて外陰部を充分に露出す、次で

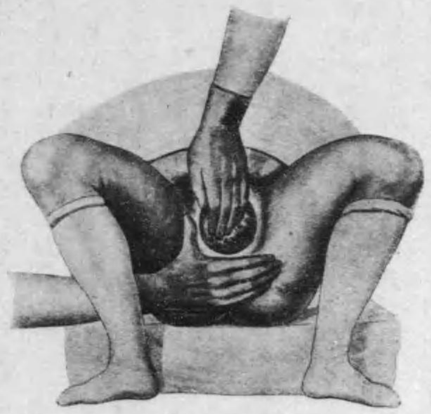
二、術者の位置　は其右側に坐し、產婦の右脚を己れの膝上に伸展せしめたる狀態に於て載せ、

三、保護を行ふ(第百七十四圖を見よ)、卽ち(イ)右手を其拇指と示指との間を充分に開きこれを陰脣、繫帶部を去る約一乃至二仙迷の所に於て陰門の後邊に並行に當て、手掌を以て會陰及肛門を壓定す、爾後陰門に近き陰脣繫帶の一部は常に必ずこれを明視し

會陰保護實施法

第百七十四圖

仰臥位に於ける會陰保護術の手付き



第百七十五圖

側臥位に於ける會陰保護の手付き

以て陰唇及會陰の伸展の狀態を知り得る樣にすべし、尙ほ手掌と會陰との間に殺菌ガーゼ又は脱脂綿の薄層を置く時は消毒を完全ならしむるのみならず手掌の滑脱を防ぎ得るの利益あり、(ロ)他手卽ち左手は其指頭を相密集せしめたる狀態か又は拇指と示指とを開きたる狀態に於て陰核を越えて兒頭に置く　(ハ)以上の如き手付きの下にて陣痛發作到らば腹壓を禁じ(廣く開口し「アー」と呼ばしむ)兩手殊に右手を以て陰唇及會陰

の伸展を助け左手を以て兒頭の正規的廻轉を助け且つ徐々に下降せしめ兒頭の娩出は主として陣痛間歇時に於てこれを促進せしむべし。

(乙)側臥位に於ける會陰保護法(第百七十五圖を見よ)。

一、產婦を左側臥位とし、下肢を股及膝關節にて輕く屈曲せしめ且つ兩下肢間に膝關節の上部に於て中等大の枕を挾み、

二、術者は其背側に坐し右手を其股間よりして外陰部及會陰に上述の如くして當て、左手は產婦の上方側の下肢を越えて上述の如くして兒頭に當て上記と全く同一の方法及注意の下に保護すべし。

一般に甲の方法が賞用さる、これ外陰部の露出充分なるために保護法を容易に且つ充分に行ふことを得從うて保護の目的をより充分に達し得るの便あればなり。

肩胛部挽出術

本法はクリステレル氏胎兒壓出法(後に詳なり)の効を奏せざるか又は胎兒の危險急にして同氏法を行ふ暇なき場合に次の如くして行ふ。

肩胛部挽出術術式(第百七十六圖を見よ)。

一、產婦の下(卽ち後)方に在る兒の肩胛部(これを後在する肩胛部と云ふ)と同名の手掌(例は第一胎向にては左手掌)を以て兒頭及後在肩胛部を後方卽ち下方より受けてこれを產婦の

前上方に壓上して後方に間隙を作り、

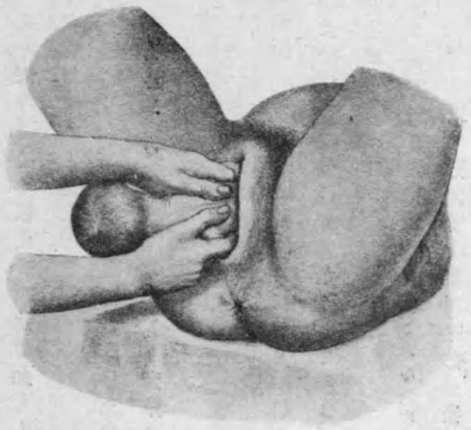
二、他側の手卽ち後在肩胛部と異名の手(例ば第一胎向にては右手)の示指を兒の背面よりして深く後在の腋窩に挿入し、中環及小の三指はこれを手掌内に屈し其中指の示指側を兒の上膊の外側に當てて示指を壓し、拇指はこれを肩胛部に置きて以て後在肩胛部を固く握り且つ其手掌上に兒頭を載せ、

第百七十六圖

術挽出部肩胛

提を峰肩胛つ且け掛に窩腋の各を指示

すとんせ出挽を幹軀て續部肩胛てり



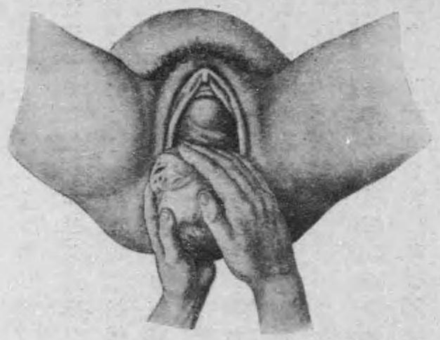
三、今迄兒頭を受けたる手はこれを直に前在する肩胛部及頸部に當てて上下の兩手互に相壓しつつ產婦の後下方に向うて兒を牽引する時は耻骨弓下に前在肩胛部娩出す、次で

四、兩手に力を入れて兒體を牽引しつつ產婦の前上方に骨盤誘導線の方向に廻轉せば肩胛部續て兒の軀幹娩出す。

第百七十七圖

肩胛部挽出術(第一操作)

兒頭を後下方に牽引して前在肩胛部を挽出せすとんせ



第百七十八圖

肩胛部挽出術(第二操作)

兒頭を前上方に引き上げて後在する肩胛部を挽出せすとんせ

若し指頭腋窩に達せざる時は兒頭を兩顴顴側より挾み注意して後下方に下ぐれば前在肩胛部前進す第百七十七圖を見よ)次でこれを前上方に上ぐれば後在肩胛部娩出す(第百七十八圖を見よ)。萬一以上の方法の効を奏せざらんか、產婦の後方に在る兒の上肢を後に逃ぶる上肢解出法によりて解出娩出せしめ、その上肢と頭部とを一所に握りて先つ前上方に、次で後下方に前後卽ち上下の振子搖運動を

行ふ時は目的を達することを得。

臍帶切斷術

初生兒が娩出後活潑に啼泣するや普通四乃至五分にして臍帶の搏動全く止みこの間に於て胎盤より約五十乃至六十立方仙迷の血液が初生兒の心臟内に流入して兒の發育を大に助くるものなり、故に本術は異常ありて止むを得ざる場合を除きては常に必ず臍帶搏動の全く停止せる後に於て、次の如く行ふべし。

臍帶切斷術術式

一、豫め殺菌消毒せる臍帶結紮絲(普通麻を用ふ)を以て臍輪を去る約二指横徑の所に第一結節を置き、更にここを去る約二指横徑の所に第二結節を行ふ、結紮時には兩手の拇及示指を以て結紮部の膠樣質を左右に擦りて其部をなるべく細くして以て結紮を固くして以て後來その弛緩滑脫して臍帶出血を起すことを豫防すべし、次で

二、左手掌内に兩結紮部を載せ、右手に臍帶剪刀(第百七十二圖を見よ)を取り其中央部を剪斷すべし、この際血液が四方に奔散するを防ぐために剪刀の上を「ガーゼ」又は脫脂綿にて被ふべし。

三、かくして剪斷せば直に胎兒側の斷端を消毒せる「ガーゼ」又は脫脂綿を以て拭ひて出血の有無を檢し、出血なくとも尙ほ念のため第一結紮絲の殘りを以て更に再び强き結紮を行ふべし。

第三項　分娩第三期に於ける處置

本期に於ては　一、子宮の收縮狀態　二、出血の有無を監視し、これに異常なくんば後產期陣痛到來し胎盤自然に剝離し排出さるるを待つべし。

(一)時々子宮の收縮狀態を檢す、一手掌を子宮體部に置きて其形狀、子宮底の高さを見ると同時に其硬度を檢す、正規の場合には子宮は適當度に平等に硬く、收縮し扁平球狀に觸れ出血なし、之れに反し子宮弛緩し、子宮底上昇し、出血存する場合には先づ子宮の收縮を促進すべし、卽ち

子宮收縮促進法

(イ)膀胱の充否を檢し、必要あらば導尿を充分に行ひ、

(ロ)子宮底部乃至體部を輪狀に摩擦し、

(ハ)子宮體部の氷罨法を行ふ。

氷罨法　氷を梅實大に細碎し水洗して以て其角を取り氷囊に半分程入れ、囊中の空氣をなるべく驅除し密閉し子宮體部には冷水に浸し絞りたる白布又は乾燥せる白布の一層を置き其上に上記氷囊を貼用し、時々皮膚の狀態を監視すべし、而らざれば凍傷を起す危險あり。

(二)後產期陣痛の有無及其性狀を注視し、

(三)出血の有無を檢す、但し此期に於ける出血は一、子宮の收縮不全による場合と

裂傷による出血と弛緩による出血との鑑別點

二、裂傷による場合とあり、而して其鑑別は

(イ)裂傷による場合は　1.子宮の收縮可良なるに係らず　2.胎兒娩出直後より　3.鮮紅色の血液が　4.絶えず流出し、

(ロ)子宮收縮不全による場合は　1.子宮の收縮不完全にして　2.胎兒娩出後一定時間の後に　3.暗赤色にして屢々凝血を混せる血液が　4.發作的に流出し　5.子宮底の摩擦又は壓迫によりて出血量を增加す、

以上の諸點より其依りて來る原因を探し、(甲)其輕度の場合には　上記の子宮收縮促進法又は壓迫法(後に詳かなり)によりて止血せしむることを得れども(乙)其強度の場合には直に醫治を乞ふべし、而らずんば短時間中に強き大出血を來し、ために母體の死を招くこと決して稀ならざればなり。

(四)後產の娩出除去　かくして胎盤自然に子宮壁より全く剝離し下降し來るや、次に述ぶる如き徵候を呈するを以て、かかる場合には腹壁外より子宮を輕く壓迫すれば胎盤は陰裂間に娩出す、而る時は

これを兩手掌を以て受け、これを徐々に一定の方面に捻轉せば漸次に卵膜が捩れたる索狀となりて娩出し來る(第百七十九圖を見よ)。

若しこの際卵膜の一部强く子宮壁に癒着して其剝離困難ならんか、忍耐して上記の一定方向の捻轉を續行し決して牽引を行ふべからず、かくして多くはこれを除去するこ

欠

一、今迄卵圓狀にして圓みを帶びたる子宮底部は扁平となり稜角狀に觸れ子宮は寧ろ細長くなり、從つて子宮底の高さ多少上昇す。

二、子宮は非常に動き易くなり。

三、而も臍帶は子宮の運動と共に移動することなし。

四、臍帶は陰門外により長く脫降す、これをアールフェルド氏徵候と云ふ。

五、耻骨縫合上緣に於て卵圓形の軟き膨隆部を認む。

(五)、褥婦の清潔及更衣、　かくして分娩全く終らば

(イ)石炭酸又は「リゾール」溶液に浸したる布片又は脫脂綿を以て外陰部及其附近を充分に清拭したる後、

(ロ)會陰腟入口陰核及其附近等に裂傷の存否を檢すべし、但しこの際臀部を上擧し又は强ひて陰脣を强く開くべからず、ために外氣が內陰部に進入して空氣栓塞を來す恐あればなり、かくて何等特別の異狀なくんば、

(ハ)外陰部に消毒綿又は殺菌「ガーゼ」を當てて以て傳染を豫防し、其上より丁字帶を以て壓定し、腹帶を適當度に懸け、產床を清潔にし、產衣を更へ、保溫して、兩下肢を接着せしめ、安靜に仰臥睡眠せしむ。

腹帶の製法　晒木綿三尺五寸の物を三枚重ね、其中央部を縱に縫ひて離れざる樣にし最外側の一枚を兩端より五、六頭に裂く。

欠

(六)爾後の監視、初生兒及後產の精檢、分娩經過の記載

爾後尠くとも二時間褥床に侍して褥婦の一般狀態特に子宮の收縮狀態、出血を監視し變に應じて上記の處置を取り、其思はしからずんば速かに醫治を乞ふべし、この間に於て初生兒に於ては其發育の度、畸形又は損傷の有無、生活狀態の健否、臍帶出血の有無等、後產に於ては其排出の完全なりや否や、病的變化の存否、損傷の有無等を精密に檢査し、更に進んで分娩經過の記載を行ふべし。

第四節　分娩直後に於ける初生兒の處置

分娩直後に於ける初生兒が强健にてよく自然的呼吸を營み高聲に啼泣する場合には暫く上記の處置をし母體の股間に靜臥せしめ、直に上記母體の監視殊に子宮の收縮狀態と出血とを注視し其異常なきを知らば、母體の監視を助手に委ねて初生兒を以下述ぶる如く處置すべし、世間往々胎兒娩出するや總ての注意を初生兒に傾け、ために母體の生命を危險ならしむることあり注意すべし。

一、沐浴　上記の臍帶剪斷を終らば直に豫め用意したる浴槽に於て兒體を清潔にすべし、此際若し胎脂が多量に附着せる場合には先づ「オレーフ」油、卵白、又は「ワゼリン」等を塗りこれを摩拭して去りたる後、攝氏四十度內外の浴湯中にて血液、粘液、羊水、胎糞等の不潔物を洗ひ去るべし、此際若し石鹼を使用するならば、なるべく無刺戟性のものを選び、皮膚を刺戟せざる樣損傷せざる樣留意するは勿論耳孔、口腔內に浴水の入らざる樣にすべし。

石鹼の良否鑑別法　石鹼を小片にけづり取りて試驗管に入れ、これに「アルコール」を滴加し、加熱するに其純良なるものは溶液全く透明なれども不純のものは其度に應じて溷濁し沈澱を生ず、皮膚を强く刺戟する遊離「アルカリ」ある時は試驗紙を强く赤色せしむ。

二、眼、口の清潔　はこれを決して浴湯を用ひず別に備ふる清水を軟き布又は綿に浸して極めて靜に微傷だも生せしめざる樣丁寧に清拭すべし、

三、クレーデ氏點眼　はなるべく早く分娩後三十分以內に於て行ふべし、卽ち　左手の拇及示指を以て上下兩眼瞼を開き右手に二%の硝酸銀溶液を有する點眼器を取り其一滴を角膜中央に滴下すべし、此際使用する硝酸銀溶液は必ず新鮮なるものならざるべからず、其舊きものは刺戟作用强く强き結膜炎を起せばなり。　本法の目的は分娩時母體生殖器內の淋毒性分泌物の感染によりて生ずる恐るべき初生兒膿漏眼(初生兒編を見よ)を豫防するにあり、母體に淋毒の有無に係らず必ず行ふべし。

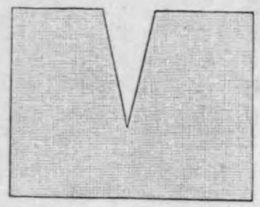
四、沐浴後の處置　かくして沐浴を終らば

(イ)豫め溫めたる「タオル」を以て兒を包み體表殊に腋窩、股間、其他の皺襞に富む部分の水分を丁寧に拭ひ去り、兒の冷却を防ぎつつ

(ロ)臍帶結紮の完否、臍帶出血の有無を注視し、次で

第百八十一圖

臍帶を包む「ガーゼ」雛形



(ハ)臍繃帶を施す、即ち約二寸平方の「ガーゼ」三、四枚を重ねたるものを取り其一邊の中央に約一寸許りの切り込みを作りたる布片(第百八十一圖を見よ)の消毒せるものにて其切れ込みの中に臍帶を入れて臍帶を包みてこれを左上方に曲げ(血管を胎生時に於けると同一の方向に向はしむるためなり)其上を臍繃帶或は卷軸帶又は小なる多頭帶を以て輕く纏絡固定す。

臍繃帶の製法

臍繃帶の製法　軟かき晒木綿を鯨尺一尺二寸位に切り縱に三つに折り重ね、其折目を兩端より四五寸深く裂きて細長き晒木綿を三枚重ねたる如くし、其中の外側の一枚だけを兩端より同じ深さに三、四頭に裂く。

卷軸帶

卷軸帶　とは木綿「フランネル」又は「ガーゼ」等を細長く切りて卷軸狀になせる繃帶を云ひ、其先端を軸頭と云ひ、他の末端を軸尾と云ひ、其中間部を軸身と云ふ、若し一端より他端まで卷く時はこれを一頭帶と云ひ、兩端より卷きて中央に到るを兩頭帶と云ひ、軸頭の二個以上なるものを多頭帶と云ふ。

(ニ)この間に於て更に兒體の檢査を充分に行ひ、次で

(ホ)着衣せしむ　衣服及襁褓等總て皮膚に直接する布片は木綿の軟きものを用ふべし、毛織物は皮膚を刺戟し、硬き物は皮膚を傷け、絹布及金巾は保溫の目的を達せざるを以て使用すべからず、又染色せる布は皮膚の不潔を來すのみならず時に染料のため、皮膚に意外の刺戟を與ふることあるを以て白色のものが宜し、衣服は寬濶なるものを緩く着け且つあまり厚着せしめず、大人より僅に厚くし其他は湯婆室溫等にて調節すべし、頭部は寒冷時に於ては眞綿を以て被ひ冷氣を避くべし、

(ヘ)臥床　は時季に應じて適當に溫め湯婆等を用ふる場合には火傷を起さしめざる樣注意し、必ず褥婦と別にし常に側臥せしめ且つ時々左右向きを變換すべし、而らざれば吐出物其他を嚥下し甚だしきは、ために窒息することあり、又一方にのみ側臥せしむれば兒頭に不規則なる變形を來せばなり。

火傷

(ト)檢溫　すべし、但し此際湯婆の影響を受けざる樣注意すべし。

火傷、第一度火傷とは皮膚發赤し疼痛あるも水疱を作らざるを云ひ、第二度火傷とは發赤、疼痛と同時に水疱を作るを云ひ、第三度火傷とは皮膚壞死に陷り其周圍に發赤、疼痛、水疱ある場合を云ふ其救急處置、第一度には酒精にて冷罨法を行ふか又は脂肪或は油を塗り澱粉を撒布し綿にて被ひ輕く繃帶す、第二度には水疱を破らざる樣にし、冷水、鉛糖水、硼酸水等による冷罨法を行ひ、第三度には油又は軟膏を塗り輕く繃帶す。

冷罨法

冷罨法　壓定巾又は大なる白布を冷却せる水又は藥物溶液に浸し輕く絞りて四乃至八層に疊み患部より稍々大にし局所に貼用し約五分毎に交換す。

五、爾後絕えず一般狀態を注視し若し呼吸淺く不正、顏面蒼白、體溫の下降等あらば醒覺せしめ背部を輕打して啼泣せしめ以て深呼吸を營ましめ又は沐浴せしめ或はホフ

マン氏液の注腸等を行ひ速に醫治を乞ふべし。

第四編　正規産褥

第一章　産褥の定義

産褥　とは妊娠及分娩による母體の生殖器及全身の變化が妊娠前の狀態に復舊するまでの期間を云ひ、普通六乃至八週日を要す。　一般に授乳婦乳を與ふる婦人を云ふ)は其而らざるものに比し迅速に且つ完全に經過す、此期間に於ける婦人を産褥婦又は褥婦と云ふ。

第二章　産褥に於ける復舊作用

産褥に於ける復舊作用とは産褥子宮の縮小と産道創傷の治癒とを云ひ、これを一、生殖器に於ける變化と　二、腹壁に於ける變化とに大別することを得。

第一節　生殖器に於ける變化

(甲)子宮殊に子宮體部に於ける變化　次如。

一、産褥子宮の位置　は普通強き前屈前傾を取り偏球形、且つ多くは右側に轉位す、これ主として左側大腸S字狀部の膨滿壓迫による。

二、産褥子宮の移動性　は著しく増し、従うて膀胱直腸等の充滿の度、褥婦の位置等により容易に其位置を變じ、攝生宜しきを得ざれば遂に病的位置をとるに到る。

三、産褥子宮の容積　は時日を經過するに從うて漸次縮小し約六乃至八週日の後には舊態に復すれども普通多少の肥厚を殘すものなり、更にこれを詳述せんか次の如し。

(イ)其大さ殊に子宮底の高さと産褥時日との關係は橋爪哲造氏によるに次表の如し。

産褥時日	子宮底の高さ	
	恥骨縫合上縁よりの距離	
分娩直後		臍下三指横徑
第一日	一一・七五糎	臍窩
第二日	一五・二〇〃	〃
第三日	一三・二三〃	臍下二指横徑
第四日	一一・四八〃	〃
第五日	一〇・一一〃	臍下三指横徑(分娩直後と同じ) 臍と恥骨縫合上縁との中央より上方二指
第六日	九〇〇〃	同　上方一指横徑
第七日	八・一二〃	臍と恥骨縫合上縁との中央
第十日	七・〇五〃	同　下方一指横徑
第十四日	五・五—六・〇〃	恥骨縫合上に僅に觸る 腹壁外より觸れず

かく子宮底は分娩直後より漸次上昇し分娩十二時間後に於ては臍窩の高さに達し、爾後漸次下降し産褥第三日に到りて初めて分娩直後に於けると同高となるかく子宮底が一時上昇する理由は　主として今迄膨大せる子宮が分娩によりて急に縮小したるため膀胱内に尿が比較的迅速に充盈するためにしてファンクック氏によれば膀胱内に尿が百〇立方仙迷たまれば子宮底は約一〇仙迷上昇すと云ふ、故に子宮底の高さを定むるには常に排尿後にすべきなり、而して上記子宮縮小の度は　初産婦は經産婦よりも著しく、經産婦に於ては分娩回數を重ぬるに從うて弱く、年齢に關係すること極めて少し。

注意、從來用ひらるる手指横徑を以て子宮底の高さを表はすことは各個人により殊に臍窩の高さに著しき差異あるを以て用ひざるをよしとす。

(ロ)其重量の關係は次の如し。

産褥時日	産褥子宮の重量
分娩直後	一〇〇〇瓦
第二日	七五〇
第一週	五〇〇
第二週	三〇〇—三五〇〃
第五週	二〇〇〃

第八週	五〇―七〇

未産婦の子宮重量は平均六十瓦なり

(ハ)其子宮腔の長さの關係は　ハンゼン氏によれば次の如し。

産褥時日	子宮外口より子宮底部に到る長さ
第十日	一〇・〇糎
第十五日	九・九〃
第三週の終	八・八〃
第四〃〃	八・〇〃
第五〃〃	七・五〃
第六〃〃	七・一〃
第七〃〃	六・九〃
第八〃〃	六・七〃
第十〃〃	六・五〃
第十二〃〃	六・五〃

四、産褥子宮の組織的變化

(イ)增殖肥厚せる筋組織は分娩後血液輸入の衰へる結果貧血に陷り、ために漸次萎縮し約四週日後に於て妊娠前の狀態に復す。この變化は後陣痛により著しく促進さるるものなり。

(ロ)增殖せる血管は血栓が形成され管腔は閉鎖し遂に消滅するが一小部分は結締織に變化す。

(ハ)增殖せる結締組織も一部は變性し吸收さるるが一部は永く存在す、これ多産婦の子宮が生理的に硬く且つ多少肥厚し居る原因なり。

五、子宮內壁に於ける變化

(イ)脫落膜の剝離面は微細なる凹凸あり且つ多少出血す、分娩時子宮內壁に附着して殘留せる脫落膜下層は其一部は壞死に陷り脫落して惡露中に排泄せらるれども大部分は新子宮粘膜の形成を司り約六週日にして完成さる。

(ロ)胎盤附着部剝離面は其廣さ分娩直後に於ては手掌大にして少しく隆起し凹凸不平にて凝血附着するも漸次時日を經るに從うて創面漸次縮小し平滑となり四乃至六週の終りには表面全く平滑となり第三ケ月に到れば全く治癒して其痕跡をさへ證明し得ざるに到る。

以上子宮內壁に於ける創面よりは多量の創傷分泌あり、これに脫落せる細胞凝血等混じて病原菌の傳染繁殖に最も適するを以て消毒を嚴重にし且つ子宮の收縮をよくして是等物質の子宮腔內に潴溜することを豫防するは實地上極めて大切なることなり。

(乙)下子宮部及頸管部に於ける變化

子宮内口は三日目には僅に一指を通じ、普通十日後には閉鎖し三乃至四週後には子宮消息子を通し得るのみになる。頸管部が妊娠前の狀態に復するには普通四乃至六週日を要し而も多少の瘢痕を殘す。

(丙)子宮腟部に於ける變化

子宮外口は第三週にして僅に消息子を通し得るに到るも、横裂し、多少の肥厚及瘢痕を殘す、ために子宮腟部は多少太くなり、硬度不等にして表面凹凸を呈するに到る。

(丁)腟に於ける變化

普通第四週に於て舊に復すれども多少廣くなり、壁は平滑となり、多少弛緩し、時に瘢痕を殘すことあり。

(戊)外陰部及會陰に於ける變化

小なる裂傷は二乃至三週にて治癒し、別に瘢痕を殘さざれども、處女膜は常に必ず其基底部まで斷裂したために小片となりて懸留す、會陰破裂は瘢痕を形成し、且つために陰門多少哆開し、そこより腟壁の一部飜轉露出す。

(附)月經及排卵の關係は

授乳婦に於ては普通一ヶ年間位月經を見ざれども(例外あり)授乳せざる場合には普通産褥を終れば月經來潮するが個人により其時期一定せず、之れに反し排卵機能は早くより行はるるものの如し、これ屢々分娩後月經を見すして而も妊娠することの決して稀ならざればなり。

第二節　腹壁に於ける變化

腹壁は多少の弛緩を殘し、その度は分娩を重ぬるに從うて強し、正中線の着色は漸次に消失し、新妊娠線は漸次に青白色乃至白色となり、遂に舊妊娠線となり永く其痕跡を留め、腹直筋の離開も漸次閉鎖するものなり。

第三章　惡露

惡露　とは産褥時に生殖器より排泄せらるる分泌物を云ひ、其成分は主として産道創傷面よりの分泌液にして、これに血液粘液脱落せる細胞或は組織及び細菌を混ず、其性狀は一種の腥さき臭氣を發するも惡臭あることなし、初めは中性又は「アルカリ」性なれども後には酸性となる、産褥の時期により其着色及量を異にすること次に述ぶる如し。其種類は子宮腔内より排出さるるを子宮惡露と云ひ、腟腔よりするを腟惡露と云ふ、産褥第一乃至第三日頃までは血液に富み暗赤色を呈して所謂血性惡露として流出し其量多し、第三日目以後は肉汁樣の所謂漿液性惡露となり、漸次其量を減じ、第八乃至第十日目頃よりは帶黄白色を呈し所謂白色惡露となり、普通第四乃至第六週の後に全く停止す。

一般に授乳婦は其量尠く其持續短し、貧血、虚弱、下痢、發汗の場合亦同じ。

第四章　褥婦の乳汁分泌作用

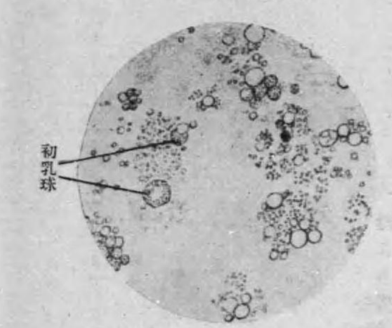
乳腺は既に妊娠の初期より發育を始むるが産褥に入るや急に盛んに發育す、ために乳房は急に強く充實緊滿し其中に結節狀又は索狀の硬き腺實質を觸るるに到り初めは水樣透明にして少しく粘稠なる液卽ち初乳或は前乳を壓出するが漸次に其性質を變じ産褥第四日目頃に到れば所謂成乳に移行す。

初乳

初乳　はこれを顯微鏡にて視れば第百八十二圖示すが如く小球狀を呈する乳球の間に大なる桑實狀を呈する初乳球なるものを含有し、且つ比較的多量の鹽類を含むため

第百八十二圖

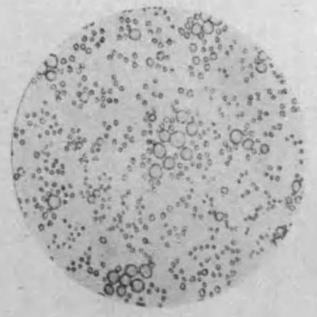
初乳の顯微鏡的所見



第百八十三圖

産褥第十日目に於ける成乳の顯微鏡的所見

大小種々なる小球は脂肪球にして其大さの小にして同大なる程良乳なり



に通痢の作用あり、これを與ふれば胎糞を充分に排泄せしむることを得るの便あり。

成乳

成乳又は通常乳　は白色不透明にして甘味を有し顯微鏡にて視れば第百八十三圖示すが如く殆んど同大の小球形をなす乳球と水分とより成る、乳汁の性質のよき者程乳球の大さ同大にして水分とよく混合するものなり、而して其主なる成分は次の如し。

水分	約八十割	灰分	約〇・一五割
乳糖	約八割	含窒素物	約一・五割
脂肪	約三割		

牛乳との相違點

牛乳との主なる相違點は次の如し。

一、人乳は全く無菌的なること。

二、人乳は牛乳に比し乳糖量多く、之れに反し蛋白分尠し。

三、人乳の蛋白は牛乳のそれに比し消化され易し。

分泌量

乳汁分泌量　は産褥の進むに從うて增加し普通産後八ヶ月頃までは漸次增加し、それより漸次減少し一乃至三年又はそれ以上に亙りて持續す、其一日の分泌量は種々なる關係により差異あれども大凡一日平均三百乃至四千立方仙迷の間を動搖し分娩後時日を經るに從うて增加すること前に述べたるが如し。

影響事項

乳汁の分泌量及性質に影響を及ぼす主なる事項は次の如し。

一、遺傳　分泌多き遺傳ある婦人は多くは分泌量豐富なり。

二、褥婦の體質並に榮養　の佳良なる程益々分泌量多く、性質佳良なり。

三、物理的の刺戟　例ば乳房を冷却すれば其量を減じ、按摩すれば其量を増す、尚ほ乳汁分泌は乳腺腔を空虛にする程其量を増す、故に授乳の際には哺乳せしめたる一方の乳房中の乳汁が殆んど全く無くなるまで哺乳せしめ決して中途にて他方の乳房と取り換ふべからず。

四、疾病　下痢高熱發汗等は其量を減じ、脚氣は乳兒脚氣を起す危險あり、又黴毒は乳兒に傳染する恐あり。

五、飲食物殊に藥品　のある種類のものは其一部が乳汁中に入りために乳兒に作用することあり注意すべし。

六、年齡及び經産回數　十五乃至二十歳にありては蛋白及脂肪分多く乳糖少し、而るに二十乃至三十歳にありては蛋白分少く乳糖量多し、又初産婦は經産婦に比し水分に富み蛋白、脂肪及乳糖の量尠し。

第五章　正規産褥の經過

褥婦は分娩後に於て多少の疲勞疼痛を訴ふるの他は却て爽快を感じ眠り易くなり且つ其際發汗し易し(これを褥汗と云ふ)又時に惡寒を來すことあるも普通發熱を伴はず、そは分娩時の冷却、過勞のために來るものにして憂ふるに足らず。

發汗の處置　發汗中は外氣の流通を避け室溫を適度にし其終るを待ちて溫暖なる手拭を以て床中にて充分に拭き去りたる後乾燥清淨なる衣服と更へしめ此際寒冷なる外氣に觸れしむべからず。

一、體溫　は次の場合、即ち　一、産褥初期に於て五分以下に於ける上昇　二、産後十二時間以内及び産褥第三乃至第四日に於て三十八度内外の上昇　を除きては常に三十七度内外にて三十八度以上の上昇は常に病的と心得べし。第二の場合の體溫上昇はこれを乳熱又は吸收熱と稱し乳汁又は惡露の排泄を充分ならしむれば下降するものなり、若し下熱せざれば病的と心得べし。

二、脈搏　分娩直後、産褥第三日目及び肉體的或は精神的刺戟ある時等に於ては多少頻數となれども其他の場合に於ては一般に緩慢にして一分間に五十乃至六十に過ぎず、これを産褥性遲脈と云ひ肉體的及精神的安靜、循環系統の變化等が其原因をなす。若し産褥に異常起る時は先づ必ず體溫と脈搏とに變化を起し來るものなるを以て特にこの二點には周密なる注意を拂ひ病變をなるべく速に發見する樣心掛くべし。

三、呼吸　は胸式となり多少緩慢となる。

四、食慾　産褥第一日は寧ろ減するも第二乃至第三日目頃より増し漸次平常に復し授乳する場合には寧ろ著しく亢進す。

五、便通及利尿　褥婦は便秘する傾向ありたために發熱の原因をなすことあり、尿は多

少増加するも産褥初期に於ては1.腹壁弛緩により腹壓不充分なること　2.分娩時に尿道、膀胱の損傷あり排尿時疼痛あること　3.腹腔内壓が急に變せること　4.褥婦の位置が排尿に不便なること　等のため尿の排泄不充分又は不可能にてために膀胱炎の原因をなすことあるを以て注意すべし。

第六章　娩出後に於ける初生兒の狀態

娩出後の初生兒に視る主なる變化を擧ぐれば次の如し。

一、臍帶脱落　剪斷せる臍帶の殘端は漸次水分を失ひ乾燥萎縮して細く硬くなり黑色を呈し、臍輪部の皮膚は輕く輪狀に發赤するが普通分娩後五乃至六日にして其輪狀發赤部より脱落す、而して其脱落せる面は初め發赤し濕潤して創面を呈するが漸次表皮を以て被はれ普通分娩後十二乃至十五日にして瘢痕を形成し強く攣縮するために陷沒して臍窩を形成す、而れども其間に於て消毒不充分なる時は容易く傳染を起して兒の生命を失ふことあるを以て充分なる注意を要す。

二、表皮の落屑　表皮は分娩後三乃至四日目頃より糠狀又は膜狀に剝離落屑す、これ皮膚の乾燥と衣服による刺戟とのためなり。

三、初生兒黄疸　初生兒は其大半に於て生後二、三日目頃より皮膚殊に前額鼻梁胸部等に黄色の黄疸樣着色を來し普通一週間内外にて自然に消褪するも時に二週餘日に亙ることあり、其原因に就ては目下尚不明なれども豫後は概ね可良にしてために特別の障碍を來すことなし、唯あまり高度にて長く持續する時は便通に留意し場合によりては醫師の診療を受くべし。

四、乳房の腫脹　生後三乃至四日目頃より男女の區別なく兩側の乳房腫脹し初乳樣の分泌物卽ち魔乳又は鬼乳を壓出することを得ることあり、其原因今尙ほ不明なるが豫後概ね可良數日にして腫脹減退し、舊に復するが稀に化膿することあるを以て注意を要す。

五、尿　は普通娩出直後に排泄さるるが、時に生後第二日目に到りて初めて放尿することあり、尿量は生後第一日最も少く五乃至五十立方仙迷に過ぎざるが漸次增量す、回數は二十四時間内に十回内外なり、時に尿中に黄褐色の細粉を混ずることあり、これ尿の一成分なる尿酸鹽類の排泄さるるにて別に異常と認むべきものならず。

六、便通　は普通一晝夜間に三乃至四回にして生後三乃至四日間は黑色又は暗綠色にして粘稠なる便卽ち胎糞又は胎便或は胎尿とも云ふを全量約七十乃至百瓦を排泄し漸次に黄色泥狀となり輕き酸臭を發す、而るに若し消化不良を起すと綠色粘稠となり其中に乳顆粒と稱する白色微細なる顆粒を混ずるに到る、胎糞は胎兒が子宮腔内に生活せる間に其腸内に蓄積せるものにして其成分は毳毛胃腸の上皮細胞脂肪球、細菌、膽汁色素及び種々なる形をなす帶黄綠色の胎糞球より成る。

魔乳

胎糞

七、體溫　は分娩直後に於ては約一乃至二度下降するも一乃至三時間後より上昇し、十乃至十五時間後には三十七度に達し以後約三十七度五分を保つも甚しく動搖し易し、

八、呼吸　は專ら腹式にして不規則、其數大凡一分間に四十內外なり。

九、脈搏　は一分間に百二十乃至百四十なり、分娩直後初生兒の血液の全量は臍帶を早期に切斷せる場合には體重の十四分の一乃至十六分の一に過ぎざるが、搏動停止後切斷せる場合には十分の一乃至十一分の一に相當す、これ臍帶剪斷は其搏動停止後に於て行ふべき所以なり。

十、體重　生後三、四日間は全量に於て約二百瓦減ずるも八乃至十日目頃に到れば分娩直後に復し、以後漸次增量すること大凡次の如し。

娩出後の時日	體重	一日の平均增加量
分娩直後	三〇〇〇・〇瓦	
第一ヶ月の終	三八〇〇・〇〃	
第二ヶ月の終	四六〇〇・〇〃	
第三ヶ月の終	五三〇〇・〇〃	二〇乃至三〇瓦
第四ヶ月の終	六〇〇〇・〇〃	
第五ヶ月の終	六六〇〇・〇〃	
第六ヶ月の終	七一〇〇・〇〃	一五瓦
第七ヶ月の終	七五〇〇・〇〃	
第八ヶ月の終	七八五〇・〇〃	
第九ヶ月の終	八一五〇・〇〃	一〇瓦
第十ヶ月の終	八四〇〇・〇〃	
第十一ヶ月の終	八六五〇・〇〃	
第十二ヶ月の終	八八五〇・〇〃	

卽ち生後第四ヶ月の終りに約倍量に、第十二ヶ月の終りに約三倍量に增加するものなり。

十一、大顚門　の閉鎖は普通第十三ヶ月頃なり。

十二、消化器　胃は其位置殆んど鉛直なるを以て非常に嘔吐し易し、故に其取扱を靜にせざるべからず、又消化作用一般に微弱なるを以て榮養法に充分なる注意を要す。

十三、五官器　視覺は生後一週日間は唯明暗を辨ずるのみ、聽覺、味覺、嗅覺等は非常に不充分なるか又は全くこれを缺く、之れに反し觸覺は比較的よく發達す。

十四、兒斑又は臀斑　は薦骨部皮膚の藍青色斑にして亞細亞人種(日本、支那等)に著しく六、七歲前後まで存在することあり、其原因不明にて何等病的意味なし。

第七章　正規褥婦の看護法

一、褥室　は清潔にして廣く、明るく、且つ換氣充分、室溫攝氏十八乃至二十度を可とす。

二、褥床　は寧ろ硬くして清潔を旨とし、なるべく白き物を用ふべし、餘り軟きは却て發汗を助くるの不利あり。

三、褥衣　は清潔にして保溫に適するものを可とし、なるべく白き物を用ふべし、これ些の汚點も直に發見することを得ればなり。

四、就褥　は尠くとも一週間、出來得べくんば二週間又はそれ以上なるべし、而して初めの兩三日間は仰臥せしめ、それ以後は左右交代に側臥せしむべし、餘り嚴重に長く仰臥せしむれば子宮後屈症（子宮が頸部の所にて後方に屈曲する疾患を云ふ）を起す危險あり。

五、離床　は生殖器の復舊作用の良否、惡露の性狀及び褥婦の一般狀態を斟酌して定むべきものにて一定せざれども一般に七乃至十四日後に離床せしめ、第四週後にて入浴せしめ靜に運動せしめ、第六週後に於て徐々に家事を行はしめ、次で交接を許すべきなり。

早期離床　とは正規分娩を圓滑に終りたる健强なる褥婦に對し既に分娩の翌日より起床せしめ、產褥第五、六日目頃には多少の歩行を許す方法を云ふ、かくして一、排便

排尿を容易に且つ完全ならしめ、二、惡露の排泄をよくし、三、生殖器の復舊作用を助け從うて褥婦の全身狀態を早く恢復せしむるの利益あり、而れども又一、子宮及び腟壁の下垂又は脫出を起し易く、二、出血を增す等の害あるを以て正規分娩を終り出血及傳染の恐なき褥婦は醫師の指揮監督の下にこれを試むるは敢て不可なきも獨斷に濫用することはこれを絕對に禁止す。

六、陰部の處置　外陰部は分娩後一週間は尠くとも一日二回の消毒を勵行し常に清淨に保つ樣努むべし、卽ち微溫の消毒溶液例ば一%の「リゾール」又は「リゾホルム」水、二%の石炭酸水、又は三%の硼酸水等に浸せる殺菌綿を以て丁寧に清拭し、後に數層の殺菌脫脂綿を當て、更に清潔なる丁字帶を掛けてこれを壓定し以て傳染を防ぐと同時に惡露をよく吸出せしめ、適當の時間の後にこれを取替ふ、殊に排便排尿後には必ず上記消毒を行ひ醫師の回診ある場合には最後に交換せるものを保存して供覽すべし、尙ほ輕度の裂傷に對しては創面をよく清拭し消毒し後に「ヨードホルム」「アイロール」「ヴィオホルム」等を撒布すべし、腟洗滌は醫師の指揮命令なき以上決して行ふべからず。

七、排便、排尿　褥婦は一般に便秘の傾向あるを以てここに留意し產褥第三日にして便通なくんば浣腸により（第百六十頁を見よ）毎日又は隔日に軟便を排泄せしむべし、褥婦はかなり多量の尿が蓄積するも何等特別の苦痛を訴へず、又排尿するも常に不充分にしてために膀胱內に尿が過量に潴溜して子宮の收縮不全從うて復舊作用不全を

排尿法

起し更に進んでは尿が膀胱内にて分解し細菌の傳染を起して比較的容易に膀胱炎を來すものなるを以て常に規則的にして且つ完全なる排尿を行はしむる樣努むべし、既に分娩後六時間を經過し排尿なからんか次の諸法により充分に排尿せしむべし。

一、異常なくんば上體を少しく擧げて放尿を營ましむ、但し強く努責するを禁ず。

二、膀胱部の溫或は冷罨法又は輕度の壓迫を加ふ。

三、消毒せる微溫湯又は冷水を尿道外口部に灌注す。

而も目的を達せずんば醫療を乞ふべしと雖も止むを得ずんば、

四、消毒を嚴重にして導尿すべし(第二百三十六頁を見よ)。

八、體溫、脈搏　を特に監視すべし、　産褥第一週日間は少くとも一日二回測定すべし、三十八度以上は常に病的と心得、充分なる警戒を怠るべからず、以前は産褥第二、三日目に來る發熱を乳熱として顧みざりしが近來はこの熱の存在を否定する學者多し、又脈搏の緩徐充實なるは産褥の好兆なるが、其頻數にして軟細なるは屢々恐るべき産褥熱の前兆なるを以て速に醫師の來診を乞ふべし。

九、飲食物　は一般に消化滋養性のものを選び興奮刺戟性のもの(例ば酒類、強き藥味類)瓦斯を生じ易きもの等はこれを避くべし、普通産褥第三日目頃までは流動食例ば重湯、葛湯、「スープ」、肉汁、牛乳、水飴等を主とし徐々に固形食を增し第二乃至第三週に到りて常食に移行す、餘り長く流動食を續くるは却て乳汁分泌を減退せしむるの不利あり。

重湯の製法

重湯の製法　よく研ぎたる白米一合に對し淨水三合五勺を加へ、加熱煮沸し沸騰し始めば釜の蓋を取り同時に火力を減じ徐々に長く煮て米粒が指間にて容易に碎き得るに到れば毛篩にて米粒を押し篩中に溜る重湯を掬ひ取る。

「スープ」の製法

「スープ」の製法　「スープ」一舛を作らんとするには鷄肉五百匁人參五十匁玉葱百匁水二舛五合を鍋に取り、初めより蓋をせずに中火にて約四時間煮て全量一舛位まで煮詰め匙にて掬ひ絹漉し又は清潔なる「フキン」にて他の鍋に漉し入れ、使用時に少量の食鹽を加ふ、煮詰める際には絶えず上浮を掬ひ取り決して液を搔き廻し又は蓋をなすべからず。

蓄乳の處置

十、乳腺の處置　乳嘴はこれを哺乳に便なる形となし、乳頭は常に清潔にして損傷なき樣にし、若し損傷あらば常にこれを清潔に保ちて傳染を避け且つなるべく早く醫治を乞はしむべし。

蓄乳の處置　授乳せざる場合には分泌過多にして乳腺强く緊滿し劇痛ある場合には乳房を摩擦又は按摩し或は吸乳器(第百八十四圖を見よ)により乳汁を吸出するが如きことは一時的のものなるを以てこれを避け　一、提乳帶によりて乳房を高く擧げて壓定するか　二、溫又は冷罨法を行ふか又は　三、飲食物を制限するをよしとす、而も目的を達せずんば醫治を乞はしむべし。

提乳帶の掛け方

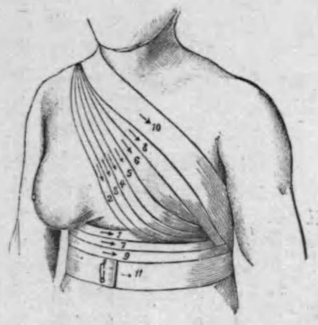
提乳帶の掛け方(第百八十五圖、甲、乙及第百八十六圖を見よ)　第百八十五圖(甲)の如く乳房を高擧し乳房下に環行を行ひ、患側乳房下より胸

第百八十四圖

搾乳器の圖

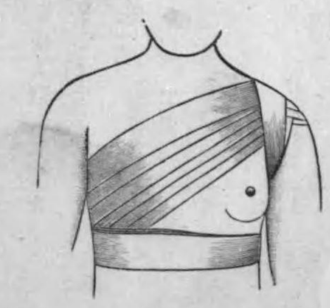
第百八十五圖(甲)

單提乳帶



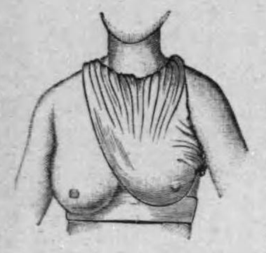
第百八十五圖(乙)

單提乳帶



第百八十六圖

提乳三角帕



前を越えて健側肩上に到り同側腋窩及肩前を周りて背面に出で斜行して患側腋窩に歸る、この8字行を上行性に反覆して環行に終るか又は第百八十五圖(乙)の如くす、提乳三角帕第百八十六圖を見よならば基底の中央を乳房直下に置き、兩尾はそれぞれ胸背を過ぎて健側肩上に結び、帕頭は患肩を越えて健側肩上の兩尾と締結す。

十一、腹壁の處置　腹壁は妊娠、分娩を重ぬるに從うて益々弛緩し、ために懸垂腹を起すに到るものなるを以て腹帶を應用し且つ腹壁の收縮伸展運動を行はしめ以て其弛緩及腹直筋の離開を豫防すべし。

十二、子宮の收縮狀態　を監視すべし、分娩後子宮收縮佳良にして且つ後陣痛が規則的にある場合には產褥子宮の復舊作用は迅速に且つ完全に行はるるものなり、故に若しその不充分ならんか其依て來る原因殊に膀胱と直腸との充否に注意し、これを除去し、加ふるに子宮底部の摩擦、子宮體部の氷囊貼布等を以てし、而も思はしからずんば醫治を乞ふべし、又後陣痛が過度に強く安眠の妨げらるる場合には下腹部の濕溫罨法を以てし、効なくんば醫治を乞ふべし。

十三、惡露の性狀　を監視すべし、其着色、其量等の產褥期日に相當するや否や、惡臭の存否、混合物例ば凝血又は卵膜片或は胎盤片の存否等を注視し、其異常例ば其量過少にして惡臭を放ち、子宮收縮不良にして子宮底過高同時に體溫、脈搏の動搖等あらんか速かに醫師の診察を乞ふべし。

第八章　初生兒の看護法

一般に初生兒の處置は褥婦の處置に先立ちて行ふべし、これ兒を清潔に保つ上に必要なり。

一、皮膚及粘膜の看護　常に其清淨と乾燥とに留意すべし、發熱、發疹、糜爛其他特別の事情なき限りなるべく毎朝、授乳前に一回づつ攝氏三十八度乃至四十度位の溫湯中にて三乃至五分間沐浴せしむべし、室はこれを密閉し、且つ冬季ならば豫め上衣、下衣、襁褓

臍繃帶等を整へ且つ溫め置くべし、石鹼は刺戟なきものを用ひ丁寧に全身を清洗し、此際特に耳孔内に浴水を入れざる樣感冒に罹らしめざる樣、臍帶斷端を牽引せざる樣注意すべし。

かくして沐浴を終らば豫め溫めたる大なる「タオル」を以て速かに全身の水分を拭ひ去り、よく乾燥せしめたる後、臍繃帶を施し着衣せしむ、此際若し頸部、腋窩、鼠蹊窩關節部等の皮膚面が糜爛せんか亞鉛華澱粉「シッカロール」の類を輕く撒布すべしと雖も、其高度の場合には必ず醫師の診療を受けしむべし、爪は生後第二週後に到り毎週一、二回の割に剪去すべし、同時に眼、口を清淨にする場合には決して浴湯を用ふることなく別に備ふる清水を浸したる軟かき布又は綿を以て極めて靜かに微傷だも出來ざる樣注意して拭ふべしと雖も屢々ために微細なる損傷を作り續て傳染を誘ふことあるを以て寧ろ勵行せず單に其清潔を謀り殊に口腔に於てはかの恐るべき鵞口瘡の存否を精密に檢査し、若し其疑ひあらんか速に醫師の診療を乞はしめ同時に他兒に傳染するを防ぐために兒を隔離するをよしとす。

二、臍帶切斷端及脫落面の處置

臍帶切斷端は勿論、脫落面も暫らくの間は一種の創面にして容易く感染して局所的續て全身的の傳染を來したために生命を危險ならしむることあるを以て常に清淨に且つ乾燥するを要す、從うて臍帶はこれを無菌にして且つ空氣のよく流通する木綿繃帶を以て包み、尙ほ不充分ならんか「アルコール」を以て拭き後に「アイロール」、「デルマトール」の類を撒布し、又尿、糞、惡露等にて汚れたる時は直に「アルコール」を以て丁寧に拭きたる後「デルマトール」、「アイロール」、「ビオホルム」等を撒布し、新鮮無菌の臍繃帶と交換すべし、脫落面も同樣にして常に其清潔と乾燥とを謀り完全に瘢痕が形成さるるまでは其部に殺菌綿を當て臍繃帶を以て壓定すべし。

三、乳兒の一般狀態を注視すべし。

體溫、呼吸、脈搏等は日々これを測定するは勿論、體重も最初の一乃至二週は毎日、其後は一週一回宛沐浴に先立ちて計量すべし、これ體重の增減は略ぼ乳兒の健康狀態と比例するものにてこれによりて病變を早く發見することを得ればなり、其他利尿と便通とに注意すべし、利尿は一晝夜に約十回內外にして其都度早く襁褓を交換すべし而らずんば外陰部、股間、臀部等に强き糜爛を來せばなり、便通は一晝夜三、四回を正規とし若し便秘あらんか微溫湯又は「リスリン」を以て注意して浣腸すべく、消化不良便ならんか榮養法を嚴重ならしむるは勿論早く醫治を乞はしむべし。

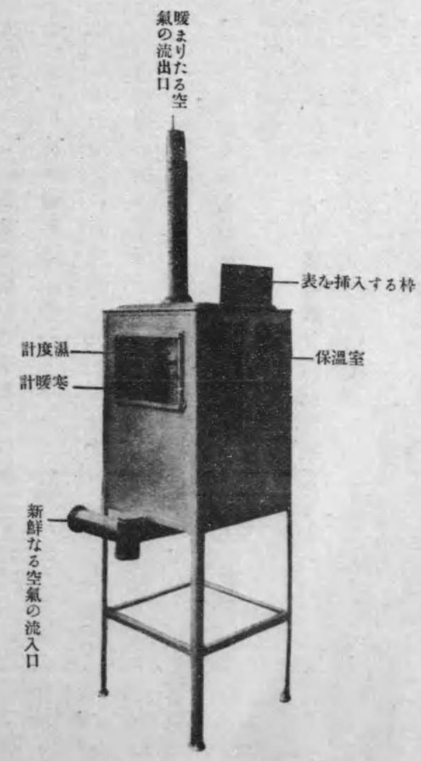
早熟兒の看護

妊娠第七ヶ月以後の早產兒にて既述の成熟胎兒の徵候を備へざるものを早熟兒と云ひ生活機能著しく不完全なるものなるを以て以下述ぶる看護を行はずんば生活を續くることを得ず。

第百八十七圖

米國製自働的電氣保溫器の圖

（東大産婦人科學教室備品）



一般に早熟兒は其體溫調節及び吸乳作用不完全なるを以て主として　一、平等なる適當體溫を保たしむること　二、適當なる榮養を與ふること　の二點に向うて全力を注がざるべからず、要するに早熟兒は看護者の親切と熱誠とによりて甫めて發育を續け得るものにて兒の生死は一つに懸りて看護者の掌中にありと謂ふべし、而して其處置は勿論醫師の指導の下に行ふべきなるが、一、平等なる適當體溫を保たしむるには　保溫器（第百八十七及第百八十八圖を見よ）と稱ふる一種の保溫裝置内に靜臥せしむるを理想とすれども其設けなき時は綿を以て

第百八十八圖

保溫器の圖

（東大産婦人科學教室備品）

兒を包み湯婆を以て溫を與へ兒の周圍の溫度を攝氏二十八乃至三十度とし、室溫は二十五度内外とすべし、若し兒の體溫三十七度以下に降る時、顏面「チアノーゼ」となる時等には直に沐浴せしめ且つ同時に強く啼泣せしめて深呼吸を營ましむべく殊に此際感冒せしめざる樣注意すべし。

二、適當なる榮養　は新たに搾取せる母乳（第百八十九圖を見よ）を三十六乃至三十八度に溫め一時間毎に二乃至三食匙位宛氣管

第百八十九圖（甲）

シェルグパル氏吸乳器

ンポ」の（ハ）に貼し（イ）の部の乳頭を吸ひ（ロ）の部に「ブンポ」てに部の（ロ）ばせ出ひ吸な汁乳てしく如の（甲）圖九十八百第

第百八十九圖（乙）

出し貯ふ

な汁乳てしく如の（甲）圖九十八百第

「ブンポ」てに部の（ロ）ばせ出ひ吸

（ニ）にこそり去り取な

なる吸乳器を付けて見よ

むせ乳吸に見て付

内に嚥下せしめざる樣注意して與へ漸次增量す、且つ時々哺乳作用を習はしむべし、早熟兒は特に鵞口瘡に罹り易きを以て乳房、哺乳器具は常に清潔ならざるべからず、其他上記初生兒の看護法を懇切に行ふこと勿論なり。

第九章　初生兒の榮養法

初生兒の榮養は母乳によるを最上とし、乳母によるもの之れに次ぎ、止むを得ずんば生牛乳、山羊乳、又は其製品による其前二者によるを天然榮養と云ひ、其後者によるを人工榮養と云ふ。

第一節　天然榮養法

第一項　母乳榮養法

一、母乳は乳兒に對し最上の榮養料なるを以て次に述ぶる場合を除くの他は常に必ず生母自ら授乳すべし、これ啻に乳兒に對して好都合なるのみならず授乳婦自らに對しても其生殖器の復舊作用を迅速に且つ完全に終らしむるの利益あり。

廢乳すべき場合

二、生母自ら授乳すべからざる(廢乳すべき)場合　は重症の結核、脚氣、精神、神經病、急性熱性病、腎臟炎、乳腺炎、授乳中の妊娠等なれども勿論醫師の鑑定によるべし、之れに反し兩親共に黴毒ある時は生母自ら授乳すべし。

三、初回の授乳　は分娩後六乃至十二時間目頃にて兒が啼泣し食を欲する時とし、初乳はこれを與ふべし、これこの中には既に述べたる如く鹽類を比較的多量に含むため、に通痢作用あり不必要なる胎糞を完全に排泄するの利あればなり、俗間使用する「マクリ」は寧ろ有害なるを以て使用すべからず、若し直に授乳し難き場合には十%の「サッカリン」液を百立方仙迷の餾水中に三乃至四滴加へ、その十乃至二十立方仙迷を與ふべし。

授乳の仕方

四、授乳法　授乳の仕方　は母體は側臥位、出來得べくんば坐位を取り一手の上膊部に兒頭を載せ、他手の示中兩指にて乳頭を挾み兒の口中に入るるために軀幹を多少前屈し乳房にて兒の鼻孔を塞がざる樣に注意す、この際兒の哺乳運動不充分なる時は乳汁を口中に絞り込むべし、

哺乳の方法

哺乳の方法　は常に必ず時間を一定し初めは二時間毎、次で三乃至四時間毎に一回とす、これ乳汁は胃中に入りて二乃至二時間半にて消化し腸に送り出さるるを以て約三十分位は胃を空虛にして休ます必要あればなり、一回の

哺乳時間

哺乳時間　は一定し難けれども乳汁豐富にして兒の哺乳作用完全ならんか大凡十乃至二十分とし充分に哺乳せしむ、夜間はなるべく哺乳を避くべし、かの乳兒が啼泣するや直に抱き起して授乳するが如き惡習慣は只に繁雜なるのみならず兒の胃腸を强く害し從うて其發育を不完全ならしむるを以て斷じてこれを避くべし、一般に乳兒は善惡共に容易に其習慣性を作るものなるを以て其初めに於て充分注意して規律正しくして惡習慣を付けざる樣に注意すべし、かくして遂には夜間の授乳を全廢し生

一回の哺乳量

後二ヶ月頃に於ては一晝夜に四乃至六回位の授乳に止むべし　一回の哺乳量　は兒により一定し難けれども大凡次表を標準とすべし。

兒の年齢	第一週	第二週	第三週	第四週	第五週	第六週	第七週	第八週	第九週	第十週	四ヶ月	四ヶ月以後一ヶ年まで
一回の哺乳量	五〇cc.	七〇〇cc.	七五cc.	九五cc.	一一五cc.	一四五cc.	一六〇cc.	一七〇cc.	一七五cc.	一八〇cc.	一八〇cc.	一八〇—一二〇〇

内野淺次郎氏の分娩直後體重二千四百瓦以上の初生兒六名に就ての研究によれば次の如し。

哺乳日	第一日（生後第二日目）	第二日	第三日	第四日	第五日	第六日	第七日	第八日	第九日	第十日
各一日の平均哺乳量	七一cc.	一八五	二四九	三三一	三三八	三一二	四一三	三五七	三六一	三八五
各日の一回平均哺乳量	一二cc.	二一	二八	四一	四八	五二	五九	五一	五二	五五

離乳

五、離乳　はこれ亦一定し難けれども大凡生後第十乃至第十二ヶ月に於てし徐々に行ふべし、若し夏期に相當せばこれを秋期まで延ばすがよし、此期には消化不良を起し易ければなり、離乳せんとする時には先づ牛乳を以て試み堪へ得るに從うて母乳を減少し遂に全廢し、漸次に消化滋養性の流動食例ば牛乳、重湯、薄き粥、肉汁、半熟鷄卵等續て固形物質を增し遂には全く固形食に移行すべきものなれども此時期には咀嚼作用不充分なる上に消化機能も不完全なるを以て常に充分なる注意をなし恐るべき消化不良症を起さざる樣に心掛くべし。

乳母の資格

第二項　乳母による榮養法

既に述べたる如く母乳は其乳兒に對し最良の榮養料なれども前に述べたる如き廢乳すべき疾病ある時又は他に止むを得ざる事情あり、生母自ら授乳し得ざる場合には適當なる乳母を選定し其乳汁を以て母乳榮養法の條下に述べたると同樣の方法及注意の下に乳兒を榮養すべし。

乳母の資格　最も適當なる乳母は次の條件を備へざるべからず、勿論其選定は醫師によりて行はるるも助產婦も亦これを知り置く必要あり。

一、全身の强健なること　即ち體格及榮養共に佳良にして齒牙全く完備し且つ性質溫和にして秩序正しきこと、從うて既に述べたる廢乳を要すべき種々なる疾病を有せざるは勿論それ等疾病の遺傳もなく其兩親、兄弟姉妹共に皆健全なるを要す、殊に黴毒は兒に直接傳染するものにて而も外觀全く健康狀態を呈することあるを以て特に充分なる檢査を經ざるべからず。

二、分娩時期　は必ずしも生母と同一時期なるを要せず、但し分娩直後の者及び分娩後一年以上經過せる者は適當ならず。

三、年齢　は二十乃至三十歳の二乃至三回經産婦にして其生兒の發育完全にて强健なるを要す。

四、乳腺　は其發育佳良にして分泌豐富、乳嘴及乳頭の皮膚は健全にして且つ哺乳に便なる形及大さなるを要し加うるに乳汁の性質佳良ならざるべからず、乳汁の性質の良否は勿論醫師によりて檢定さるべきなれども大體に於て乳汁の一滴を指頭に滴らしこれを振りて容易に其形を變せざるものは佳良なりと推定することを得。

乳母の攝生法

かくして選定せる乳母の攝生法は極端ならざる限りはなるべく從來の生活法に從はしめ、普通の馴れたる食餌を與ふべし、急にこれを變せしむる時はために却て乳汁の分泌量及性質に惡影響を及ぼすものなり。

第二節　人工榮養法

本法は遂に人乳を得る能はず止むを得ず他動物例ば牛、馬、山羊等の乳汁を代用して以て兒を榮養する方法なり、而して其乳汁の種類により各々多少の一長一短あれども其求め易き點に於て最も廣く牛乳が使用さる、故に茲にも牛乳による人工榮養法に就て述ぶべし。

牛乳は其新鮮純粹なる者に於てすら人乳に比し既に述べたる相違あり、而も吾人の使用する牛乳は只に純粹ならざるのみならず搾取後既に長き時間を經過し其間に於て種々なる細菌が作用し、且つ種々なる手入れ殊に消毒が施され居るを以て生母又は乳母の乳房より直接に與へらるるものとは到底比較すべからず、從うてこれによる榮養には種々なる危險障碍あり引いて乳兒の健康に幾多の障碍、不都合を起し到底滿足なる結果を納め得ざるは理の明かなる所なり、故に吾人がこの榮養法を應用せんとする場合には極めて周密なる注意を以て害をなるべく尠くする樣努むると同時に常に乳兒の全身狀態殊に消化器の狀態を嚴重に監視し異變に際して速かに醫師の診療を乞ひ其指導に從ふべし、今左に特に本榮養法を行ふ場合に注意すべき諸點を記述すべし。

牛乳稀釋法

一、使用すべき牛乳　は注意して飼養されたる健强なる牛より清潔に搾取されたるべく新鮮にして純粹なるものならざるべからず、從うて牛乳屋を適當に選定せざるべからず。

二、牛乳は適當に稀釋及補給されざるべからず、既に知る如く牛乳は人乳に比し蛋白質多く糖分尠し、故にこれを適當に稀釋及補給して人乳に近からんめざるべからず。

(イ)稀釋法　は牛乳の性質、乳兒の强弱、消化の良否、發育の狀態等により一定せざれども大凡次表を標準とすべし。

乳兒の年齢	牛乳	水
一乃至二ヶ月	一	二
三ヶ月內外	一	一
五ヶ月內外	二	一
七ヶ月以後	全乳	

水に代ふるに燕麥、大麥等の穀粒煎汁を以てせば牛乳の消化をよくすることを得れどもこれ等は醫師と相談の上に行ふべし。

穀粒煎汁の製法及用法　二百立方仙迷の水中に四瓦の穀粒を入れ一時間弱火にて煮て減りたるだけ湯を加へて元の二百立方仙迷とし、これを二三枚の「ガーゼ」にて濾す、一ヶ月目には〇・五%、二ヶ月目には一乃至二%、三ヶ月目には二乃至三%、四ヶ月以後には二乃至四%の割に入れて用ふ。

(口)糖の補給　は兒の狀態により多少の差異あれども大體に於て乳糖及「マルツ」汁「エキス」は普通は五%の割に、便秘ある場合は八乃至十%の割にし、ソクスレット氏滋養糖は下痢に傾ける場合に賞用するが約五%の割に、白糖は五%の割に、兒の充分發育せる場合には蔗糖を四乃至五%の割に補給す。

三、牛乳は無菌的にして且つなるべく分解の少き狀態に於て與へられざるべからず、

即ち完全にして合理的なる消毒が施されざるべからず、何とならば牛乳は種々なる細菌の好き榮養料なるを以て短時間內に驚くべき繁殖をなして以て乳兒を直接及間接に害すること大なればなり。

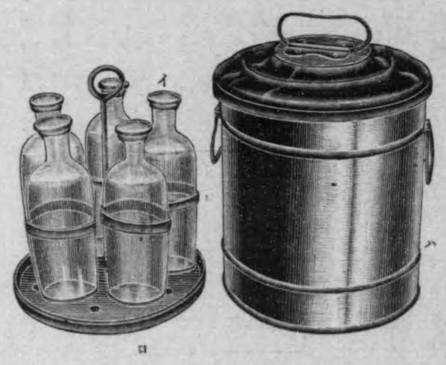
消毒法　としては種々あれども現今最も賞用さるるは熱氣消毒法なり、而れども

あまり熱度が高ければ穀菌は充分なるも質を變ずるの不利あり、さりとて低熱なれば目的を達せず到底理想的のものなし。

現今一般に使用さるる法はソクスレット氏消毒器による煮沸消毒法なり、即ち第百九十圖に示す裝置中(イ)なる硝子瓶中に一回量の牛乳を清潔に入れ、これに清潔なる護謨製の蓋をし、その半日又は一日分を(ロ)なる瓶架に載せて(ハ)なる煮沸鑵內に入れ更に鑵內に硝子瓶の肩に達するまで水を入れ蓋をなしたる後これを煮沸し、沸騰し初めてより五乃至十分を經たる後に取り出して冷き所に貯へ用に臨んで攝氏三十七度內外に溫めて授乳す、其殘り、一日以上を經たるもの、又は腐敗其他の異常の疑ひあるものは斷じて使用すべからず、其際使用する諸

第百九十圖

牛乳煮沸消毒器の圖



器具の清淨なるべきは勿論なり、從うて使用後は直に清洗すべく、若し直に行ひ難き場合には重曹水又は石鹼水中に入れ置くべし。

四、「コンデンス、ミルク」即ち煉乳の使用法

既述の如く生牛乳すら既に幾多の危險及障碍あるに「コンデンス、ミルク」は非常に多量の糖分を有する舊き牛乳なるを以てこれによる榮養法は生牛乳による場合よりも更に大なる困難と不合理との存するものなり、故に出來得るだけこの使用を避け全く止むを得ざる場合に限りなるべく純良なるものを選び、既に述べたる注意及方法を特に勵行しつつ使用すべし、製品としては本邦製品殊に「ネッスル」及人形印最も賞用さる。而して其稀釋法は大體次の如くなるも常に醫師の指導によるべし。

乳兒の年月	煉乳	水
第一ケ月		
第二乃至三ケ月		
第四乃至第六ケ月		十二
第七乃至八ケ月		十八
第九乃至十ケ月		六
第十一乃至十二ケ月		五
		四

使用後鑵の蓋は常に充分にし、稀釋する水は一度煮沸し冷却したるものを使用すべし。

白木助產婦學　前篇終

大正十一年一月二十日印刷
大正十一年一月二十五日發行

不許複製

正價金參圓九拾錢
白木助產婦學　前編

著者　白木正博　東京市本郷區龍岡町三十二番地
發行者　鈴木幹太
印刷者　大久保秀次郎　東京府北豐島郡巢鴨町三丁目十番地
印刷所　株式會社東京築地活版製造所　東京市京橋區築地二丁目十七番地

發行所　東京市本郷區龍岡町三十二番地
電話下谷四一七八・振替東京六三三八　南山堂書店

賣捌書肆

東京市本郷區春木町三丁目　南江堂書店
同　同　二丁目　牟田屋書店
同　湯島切通坂町　金原書店
同　富倉書店
同　宮澤書店
同　龍岡町　吐鳳堂書店
同　文榮堂書店
同　根津書店
同　南江堂支店
同　元富士町　克誠堂書店
同　文光堂書店
同　芝區愛宕町　明文館書店
同　日本橋區通三丁目　丸善書店
同　神田區表神保町　東京堂書店
同　通新石町　朝香屋書店
大阪市博勞町　丸善大阪支社
同　江戸堀　荒木書店
同　松本書店
京都市三條寺町　南江堂京都支店
同　丸太町通川端　進文堂書店

京都市丸太町通　國井書店
名古屋市中區榮町　丸善書店
同　同老松町　大竹書店
同　同横三藏町　三輪書店
仙臺市國分町　丸善支社
新潟市古町通　北光堂書店
金澤市片町　宇都宮書店
同　廣坂通　いろ屋書店
同　內田書店
岡山市內山下　渡邊書店
同　東中山下　文江堂書店
福岡市博多　丸善福岡支社
熊本市新二丁目　長崎次郎支店
同　洗馬町　芹川書店
長崎市引地町　集榮堂書店
鹿兒島市仲町　谷村書店
千葉市　明文館支店
同　松田屋書店
同　寶文堂書店

56
177

終